

INSTRUMENTS OF NIPPON MUSIC FOUNDATION

目次

楽器図録の発行にあたり (海老沢勝二)	4
祝辞 (笹川陽平)	6
日本音楽財団コレクション (アンドリュー・ヒル)	8
楽器の世界遺産、そのケアと扱い方について (ヒエロニムス・ケストラー、アネット・ゴラー)	12
ストラディヴァリウス「パガニーニ・クアルテット」	16
ストラディヴァリウス 1680 年製ヴァイオリン「パガニーニ」	18
ストラディヴァリウス 1727 年製ヴァイオリン「パガニーニ」	24
ストラディヴァリウス 1731 年製ヴィオラ「パガニーニ」	30
ストラディヴァリウス 1736 年製チェロ「パガニーニ」	36
ストラディヴァリウス 1700 年製ヴァイオリン「ドラゴネッティ」	42
ストラディヴァリウス 1702 年製ヴァイオリン「ロード・ニューランズ」	48
ストラディヴァリウス 1708 年製ヴァイオリン「ハギンス」	54
ストラディヴァリウス 1709 年製ヴァイオリン「エングルマン」	60
ストラディヴァリウス 1710 年製ヴァイオリン「カンポセリーチェ」	66
ストラディヴァリウス 1714 年製ヴァイオリン「ドルフィン」	72
ストラディヴァリウス 1715 年製ヴァイオリン「ヨアヒム」	78
ストラディヴァリウス 1716 年製ヴァイオリン「ブース」	84
ストラディヴァリウス 1717 年製ヴァイオリン「サセルノ」	90
ストラディヴァリウス 1722 年製ヴァイオリン「ジュピター」	96
ストラディヴァリウス 1725 年製ヴァイオリン「ウィルヘルミ」	102
ストラディヴァリウス 1735 年製ヴァイオリン「サマズィユ」	108
ストラディヴァリウス 1736 年製ヴァイオリン「ムンツ」	114
ストラディヴァリウス 1696 年製チェロ「ロード・アイレスフォード」	120
ストラディヴァリウス 1730 年製チェロ「フォイアマン」	126
ガアルネリ・デル・ジェス 1736 年製ヴァイオリン「ムンツ」	132
ガアルネリ・デル・ジェス 1740 年製ヴァイオリン「イザイ」	138
楽器サイズ	144
参考文献	146

Table of Contents

On Publication of “Instruments of Nippon Music Foundation” (Katsuji Ebisawa)	5
Message of Congratulations (Yohei Sasakawa).....	7
Collection of Nippon Music Foundation (Andrew Hill).....	10
Caring About and Taking Care of World Heritage Instruments (Hieronymus Köstler, Anette Goller) ...	14
Stradivarius “Paganini Quartet”	16
Stradivarius 1680 Violin “Paganini”	18
Stradivarius 1727 Violin “Paganini”	24
Stradivarius 1731 Viola “Paganini”	30
Stradivarius 1736 Cello “Paganini”	36
Stradivarius 1700 Violin “Dragonetti”	42
Stradivarius 1702 Violin “Lord Newlands”.....	48
Stradivarius 1708 Violin “Huggins”	54
Stradivarius 1709 Violin “Engleman”	60
Stradivarius 1710 Violin “Camposelice”	66
Stradivarius 1714 Violin “Dolphin”	72
Stradivarius 1715 Violin “Joachim”	78
Stradivarius 1716 Violin “Booth”	84
Stradivarius 1717 Violin “Sasserno”	90
Stradivarius 1722 Violin “Jupiter”	96
Stradivarius 1725 Violin “Wilhelmj”	102
Stradivarius 1735 Violin “Samazeuilh”	108
Stradivarius 1736 Violin “Muntz”	114
Stradivarius 1696 Cello “Lord Aylesford”	120
Stradivarius 1730 Cello “Feuermann”	126
Guarneri del Gesù 1736 Violin “Muntz”	132
Guarneri del Gesù 1740 Violin “Ysaÿe”	138
Table of Measurements	144
References	146

楽器図録の発行にあたり

公益財団法人日本音楽財団
会長 海老沢 勝二



このたび日本音楽財団は、所有するストラディヴァリウスとグァルネリ・デル・ジェス計 21 挺すべての特徴、来歴、写真等を 1 冊の本にまとめました。この図録を弦楽器に関心を持たれる方々の資料のひとつに加えていただければ幸いです。

日本音楽財団は、1994 年よりストラディヴァリウス等の弦楽器を、国際的に活躍する演奏家や若手有望演奏家は無償で貸与する事業を実施しています。当財団が最初に入手したのはストラディヴァリウス「パガニーニ・クァルテット」ですが、これは世界で確認できるストラディヴァリウス・クァルテット 6 セットのうちのひとつで、私どもが入手できたことは大変幸運なことであり、事業開始に弾みがつきました。以来、日本財団（笹川陽平会長）の支援の下、最高クラスの弦楽器を収集して参りました。

当財団の弦楽器の購入は、(1) 保存状態が良く、演奏会での使用に適していること、(2) 世界的文化遺産として後世に遺す必要性を有していること、(3) 故事来歴が明らかで、真贋の疑いがないこと、(4) 価格が市場と照らし合わせて適正であることに加え、(5) 演奏家と競合しないことの 5 項目の基本方針に基づいて実施しています。

所有楽器の修理と保守は、1994 年当初から当財団の指定楽器商において、楽器に最も負担がなく現状維持できる処方を選んで実施しています。弦楽器名器を次世代に引き継ぐため、今後も、保守保全に努める姿勢に変わりはありません。

最後になりましたが、日本音楽財団の事業に際して全面的な支援をいただいている日本財団、また、発行にあたり協力いただいた皆様に、衷心より御礼申し上げます。

On Publication of “Instruments of Nippon Music Foundation”

Katsuji Ebisawa
Chairman, Nippon Music Foundation

The Nippon Music Foundation has compiled into one book the most recent iconographies, historical documents and character information of our collection of 21 Stradivarius and Guarneri del Gesù instruments. We hope that this book will become an additional resource for those who wish to learn more about stringed instruments.

In 1994, the Nippon Music Foundation launched the Instrument Loan Project through which the Foundation has been loaning stringed instruments such as Stradivarius gratis to internationally active musicians and young promising musicians. The first instruments the Foundation acquired were the Stradivarius “Paganini Quartet”, one of only six confirmed sets of Stradivarius Quartets in the world. The fact that we were able to obtain these instruments was incredibly fortunate, and this boosted our project. Since then, with the generous support of The Nippon Foundation (Chairman Mr. Yohei Sasakawa), the Foundation has come to gather a number of top quality stringed instruments.

There are five basic principles the Foundation abides by when acquiring instruments: 1) the instrument is in excellent condition and suitable for concert activities, 2) the instrument is recognized to be a world cultural asset that must be preserved for next future generations, 3) the instrument has a good provenance and is confirmed to be genuine, 4) the price of the instrument is fair and in line with the market price, and finally 5) we do not compete with musicians who wish to obtain the instrument.

As for repairs and maintenance of our instruments, since the beginning of the project in 1994, under the guidance of our designated luthiers, we have focused on methods to preserve the original condition as far as possible with the least amount of strain on the instruments. We will continue to strive for the preservation and maintenance of top quality stringed instruments for future generations.

Finally, I would like to express my sincere gratitude to The Nippon Foundation for their full support of our Foundation’s projects, as well as all those who have made their contributions for the publication of this book.

祝 辞

公益財団法人日本財団
会長 笹川 陽平



約 30 年前、私はクラシック音楽界の方々に、特に弦楽器の名器が高額となり個人レベルでは入手が難しくなり演奏家が困っているという話を聞いたことから、ストラディヴァリウス等の歴史ある弦楽器を購入して演奏家に貸与する事業を日本音楽財団に提案いたしました。アントニオ・ストラディヴァリが生きていた時代から、彼の製作する楽器は当時としても高価なものだったといわれていましたが、現在は驚くほど高額になっているのも事実です。

300 年以上前にイタリアのクレモナで製作されたストラディヴァリウス等の弦楽器の名器が、現在も製作当時に近い状態で保存され、演奏されていることは、それらの楽器を管理してきた楽器商、所有者、そして演奏家たちが、それぞれにそれらが貴重な楽器であることを認識して大切に取り扱い続けてきた賜であると確信すると同時に、携わってきた皆様に心より感謝しています。

日本音楽財団は、いわゆる「楽器コレクター」ではなく、楽器を無料貸与することで才能ある若手演奏家の活動を支援する財団で、楽器貸与は国籍を問わず、国際的な審査委員会の決定の基で実施しています。世界中の音楽愛好家に名器による素晴らしい音楽を楽しんでいただけたら幸いです。

このたび、日本音楽財団が所有する弦楽器の名器 21 挺の特徴や写真をまとめたこの楽器図鑑が発刊されますが、音楽関係者のみならず貴重な歴史的資料として活用されることを願っております。

日本音楽財団が実施している弦楽器の名器を次世代へ引き継ぐための「楽器保全」と、若手演奏家を支援する「楽器貸与」のさらなる事業発展に期待します。

Message of Congratulations

Yohei Sasakawa
Chairman, The Nippon Foundation

About thirty years ago, I heard from people in the classical music world on how top quality stringed instruments had become so expensive that musicians could hardly afford them by themselves. Therefore, I suggested a project to the Nippon Music Foundation that would involve acquiring historical stringed instruments such as Stradivarius, and loaning them to musicians. Instruments made by Antonio Stradivari were said to be extremely valuable even during his lifetime, but it is also true that the prices have become shockingly expensive today.

I am truly grateful to everyone who made their contributions to the preservation of top quality stringed instruments made in Cremona, Italy more than 300 years ago such as Stradivarius, keeping them in almost the same condition as when they were made and enabling them to be played even today. I am sure that such achievements were made possible with the efforts by each luthier, owner and player who had handled these instruments with great care, acknowledging how valuable they were.

The Nippon Music Foundation is not an “Instrument collector” as such, but an organization that supports the careers of talented young musicians by loaning instruments gratis to them. To whom the Foundation’s instruments are to be loaned is determined regardless of their nationalities and based on the selection of international committee members. I hope that classical music enthusiasts across the world will enjoy the wonderful music played on these masterpieces.

This book published by the Nippon Music Foundation compiles features and photographs of their 21 top quality stringed instrument collection. I wish that this book will become a useful resource not just for those involved in the music field, but also an important historical document in general.

I have great expectations that the Nippon Music Foundation will continue to develop their “Instrument Preservation Project”, maintaining top stringed instruments for future generations, and their “Instrument Loan Project”, supporting young musicians.

日本音楽財団コレクション

アンドリュー・ヒル

1993年6月、ある日本の財団の方から、面会を希望しているので近いうちにお時間をいただけないだろうか、という電話を受けました。内々に相談したいことがあるとの事で、その数日後には、錚々たる顔ぶれの代表者たちとロンドンでお目にかかりました。

弦楽器から成るコレクションの形成や財団の設立は新しいことではありませんし、世界中の主な団体や学校は一世紀以上にわたり所有する弦楽器を貸し出してきました。そして今度は、日本の財団が同じことを始めたい、しかし、他とは異なる志があるというのです。何世紀にもわたって受け継がれてきたものを保存し、維持していくことの必要性を痛感していると、財団の代表者たちは話してくれました。

これから国際的なキャリアをスタートするにあたり、トップクラスの楽器を手に入れる資金が無いという演奏家を支援するための貸与という側面と、より優れた楽器を厳重に保存する、つまり、生きた美術館になるという側面も備えているということでした。既に東京では綿密な計画が練られていたようで、私にはその内容全てが文字通り音楽のように聞こえ、本当に実現することができればセンセーショナルな事だと伝えました。誰もがこれらの名器に対して畏敬と尊重の念を持つべきであるにもかかわらず、それを失念してしまう演奏家がいることは悩ましい事実です。そうした中、ここに楽器貸与と同様に楽器の保守も重視するという財団が現れたのです。事の始めにあたり、まずパガニーニ・クアルテットが挙げられ、私は前述の内容について他言することなく、入手が可能であるかを調べるように依頼され、それから先のことは東京に戻ってから進められることになりました。全ては極めて順調に進み、1年足らずでパガニーニ・クアルテットは日本音楽財団の手に渡りました。とても幸先の良いスタートとなったのです。

日本音楽財団が楽器を購入する背後にある理念は、常に、市場に出てくる楽器のうち最高のものを保守することであり、この努力を通して、いわば、時を止めることを願ったのです。とても興味深いことに、過去の偉大な収集家の中には演奏こそしないものの、職人の技術と創造された美、つまり情熱を見極める目を持つ方がいました。そのお陰で我々は今こうして数多くの素晴らしい楽器を目にし、賛美することができるのです。

楽器は使われるためにあるので、事故はつきものです。オリジナルの一部が失われてしまうと、それは二度と元に戻ることはありません。しかし、運命が不思議に作用することもあります。50数年前、私の昔の工房に、海水でダメージを受けたある有名なストラディヴァリウスのチェロのパーツの入った箱が運び込まれました。この楽器の奏者は、これまで、ところどころにある小さな修理に割く時間を惜しんでいましたが、これで修理を余儀なくされた訳です。我々は想定を超える修復に成功し、音色は「前より良くなった」と言われるほどで、大西洋で起きた難破事故はハッピーエンドとなりました。

日本音楽財団の楽器にも、購入する際に簡単な修理を要したことがありました。前述のチェロのように、過去の所有者たちが適切な修理を行わなかったためと思われる、例えば、パーフリングに届きそうなほど摩耗したコーナーや、僅かなサイズ変更が必要なペグホールといった箇所です。財団は、これらの問題を解決する世界屈指の修復家たちの恩恵に与ってきました。

パガニーニ・クァルテットを入手した後、これと同等の楽器を他にも探すことを任されました。私にとっては任務というより喜びでしたが、それはいかなる交渉も極秘で進めなければならないことを意味していました。これは極めて重要なことで、潤沢な資金があるらしいとヴァイオリン業界から注目されるようになったため、東京にあらゆる売却のオファーが殺到していたからです。しかもその多くは投機を目的とする楽器商の類からで、完璧とは程遠い代物を当然のように法外な値段で売りつけようとしていました。適切な手入れと保守を重要視していたからこそ良質の楽器のみが日本音楽財団に集まったことは事実であり、楽器の所有者は、次の所有者が楽器に神経を注ぐか保証のない公開のオークションで売却するよりも、財団であれば自分の愛した楽器を大切にしてくれるだろうと、いくらかの安心を得ることができました。

日本音楽財団は、最初期の1680年製パガニーニから、秀作1736年製「ムンツ」まで、工房で50年間にわたり製作されたストラディヴァリウスのコレクションを見事に形成しました。これら全ての楽器にはそれぞれの個性があり、財団が楽器の来歴と状態を重視し、「どのような音がしていたか」に基づいた選択はあり得なかったことに、私自身も全面的に賛同していました。それが特に密接に関わってくるのは、50年以上も楽器の消息が不明で、弾かれていなかったとされる場合で、このような時に、それ以前の来歴の知識が必要になるのです。二つのガールネリのどちらも興味深い例ですが、旧イザイ / アイザック・スターンに関しては、財団が購入することを誰にも口外しないようにと厳しく定めた条件が課され、一般の人はおろか、スターン家の人々にも知られることはありませんでした。こうした財団の思慮深さが財団を成功に導いた要因です。全てが始まって四半世紀が経ち、財団の事業は演奏家にとって非常に大きな助けになってきたと心から思います。財団の楽器保全への配慮は模範的であり、初めに描いていたことが結実したことに心から感謝しています。私にとってもこの上ない成果となりました。

アンドリュー・ヒル

ヒル家は英国で代々400年近く続いてきた楽器商である。日本音楽財団の楽器アドバイザーを務めるアンドリュー・ヒル氏は、彼自身の言葉によれば少々めずらしい経歴の持ち主で、英国古美術業協会会長、国際芸術作品交渉者連合(CINOA)会長、国際弦楽器・弓製作者協会会長を歴任している。60年前に実家であるW. E. ヒル & サンズで見習いとして修行を始め、1960年から1年間、パリの老舗エティエンヌ・ヴァテローの下で学んだ。

Collection of Nippon Music Foundation

Andrew Hill

June 1993, we get a phone call on behalf of a Japanese Foundation to ask if we could make some time available soon, for a meeting? There was a confidential matter that they wished to discuss, so a few days later, I met an impressive delegation in London.

Forming collections or foundations of musical instruments of the violin family is nothing new, many major organisations or academies across the world have had loan collections for more than a century; and now a Japanese Foundation wished to do the same, but there was intended to be a difference. It was explained to me that the members of the delegation were very much aware of the need to conserve and maintain what has been handed down to us over the centuries.

The loan side to assist international musicians at the start of their careers, when they would certainly not have the funds to have access to top quality instruments, was one half; the other half being the strict preservation of the better instruments, in effect, a living museum. It appeared that everything had been gone into in great detail back in Tokyo, and the whole idea was literally music to my ears, I commented that if it could be made to work it would be a sensational thing to do. In spite of the reverence and respect that we should all have for these instruments, it is a distressing fact that players sometimes fail in this regard; here was the proposal for a loan organisation pledged to preserve as an equal priority. To start matters off, the Paganini Quartet was mentioned, and without disclosing anything of the above, I was asked to find out its availability, pending further discussions back in Tokyo. These were extremely positive, and within a year, the Quartet was acquired by the Foundation, as it turned out, an auspicious beginning.

The philosophy behind the Foundation's acquisitions has always been to preserve the best of its kind as it became available, in the hope that this effort would, so to speak, stop the clock ticking. It is intriguing that some of the greatest collectors from the past were not even players, but they had eyes for the workmanship and beauty created; a passion, in fact, and this has allowed us to look at and appreciate so many wonderful instruments today.

Inevitably, as a musical instrument is used as intended, accidents can and do happen, and once part of the original is lost, it is gone forever. Fate does move in mysterious ways, though: some fifty years ago, my old firm received a packing case with the saltwater damaged parts of a well-known Stradivari v'cello. Now the player would never give up any time for it to have some minor pieces of restoration that had been needed for years, now he was obliged to. We were able to conserve much more than anticipated and the tonal result was pronounced 'better than before', so a shipwreck in the Atlantic had a happy ending.

Some of the Foundation's instruments needed some modest restoration at acquisition, just as with the v'cello above, the owners would not look after the maintenance properly; perhaps a corner worn close to the purfling, or maybe the peg-holes needing discreet re-sizing. The Foundation has had the benefit of the world's best restorers to deal with such matters.

After the Paganini Quartet, I was tasked with finding other suitable items, for me personally, more a pleasure than a task, but it meant that any negotiations were kept totally private. This was vital, as the possibility of serious funds being available soon came to the attention of the violin community, and all sorts of offers flooded into Tokyo. Many of them came from speculative dealer types, trying to unload less than perfect items at naturally, an inflated price. It is true to recount that many of the fine instruments were only made available to the Foundation because of the emphasis on proper care and maintenance, the owners feeling that at least they had some reassurance that the items they loved would be cared for rather than be sold at public auction; with no guarantee that the buyer would be a sensitive new owner.

The Foundation has managed to put together a collection of Stradivaris spanning fifty years of the workshop, starting with the very early Paganini of 1680, and ending with the splendid 'Muntz' of 1736. All these instruments have their own character, and I was in total agreement with the Foundation, that choice would depend on history and condition, no selection would ever have been possible based on 'what the instrument sounded like'. This is particularly germane, when it is considered that some violins had been out of sight and unplayed for more than fifty years, which is where knowledge of their previous history comes in. The two Guarneris are both interesting examples, the ex Ysaÿe/Isaac Stern being bought by the Foundation under such confidential terms, that none of the public or the Stern family knew of its sale. This discretion shown by the Foundation has been a notable contribution to its success; now it is a quarter of a century since it all began, and I have to say that I think it has been an enormous help to players. The concern for the instruments' welfare by the Foundation has been exemplary, what was envisaged at the beginning coming to fruition, deserving the most grateful thanks. For me it has been an unqualified success.

Andrew Hill

The Hill family has been in the instrument business for nearly 400 years. Mr. Andrew Hill, Nippon Music Foundation's instrument advisor has, as he himself has said, had a slightly unusual career so far; he has served as the President of the British Antique Dealers' Association, as the President of the International Confederation of Negotiators in Works of Art (CINOA) and also as the President of the International Society of Master Violin and Bow Makers. He started as an apprentice at the bench in the Hill firm sixty years ago, spending a year in the Paris workshop of Etienne Vatelot in 1960.

楽器の世界遺産、そのケアと扱い方について

ヒエロニムス・ケストラー
アネット・ゴラー

この概論では、弦楽器の日々必要なケアと修復の非常に基本的な考え方について触れたいと思います。

当然ながら一般的な楽器についてではなく、とはいえどんな楽器も大切に扱われるべきですが、何世紀も前に製作され、今日まで存在し続け、弦楽器製作の最高峰とされる極めて優れたヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、つまり、ストラディヴァリはもちろん、いくつか名前を挙げるならば、ガエルネリ・デル・ジェス、アマティとガエルネリ一族が製作した楽器についてです。こうした最高級の楽器で形成されたコレクションの一つ、日本音楽財団のコレクションについて話をします。歴史的、芸術的、そして機能性においても価値を有する素晴らしい世界文化遺産であるこれらの楽器の価値を完全な状態で維持するには、良い演奏家によって演奏される必要があります。楽器は適切に弾かれていないと、音のクオリティを損なってしまいます。よって、弦楽器職人はあらゆる要求に応えると同時に、楽器の持つ全ての価値を維持しなければなりません。壁にかかっている絵ではないので、製作当時の職人技や芸術的な価値を守りながら機能性を保つためには、楽器は良い音で鳴る必要があります、演奏家から傷つけられたり、逆に、演奏家に害を与えたりすることがあってはなりません。

何百年何十年もの間に音に対する好みは変化し、それに伴い、より力強い音を引き出すために、ネックの角度、駒のデザイン、弦は進化し、変化し続けてきました。幸いにも、本体部分は変わりなく、そのままの形が維持されてきましたので、今でも同じ形と状態の名品を手にすることができます。この先何十年、何百年も楽器が生き残ることを保証するためには、私たちそれぞれが、日常的にケアし、慎重に使用することから始め、必要な場合には楽器の保全に重点を置く専門家によるメンテナンスや修復を施すなど、できる限りのことをしなくてはなりません。例えば、ストラディヴァリの楽器はいつの時代も価値のあるものとされてきましたが、その理由の一つは、常に、演奏家や弦楽器職人に大切に扱われてきたからです。

日々のケアはそれほど複雑なことではありません。楽器は清潔な手を好みます。香水やローションの使用はできれば避けてください。あちこち触れられるのは好まず、ネックに限ります。可能な限り、毎回、使用直後に松脂の粉を落とし、汗や唾液を拭き取るようにしてください。演奏家は異質な音や雑音等の音の変化に敏感でなければなりません。継ぎ目が開いている場合があるからです。加えて、気候の変化も気にしなくてはなりません、楽器も人間のように気候によって気分の変化があるので、音が変化したからといって、その度に音の調整を試みない方が良いでしょう。私たちと同じように楽器は生きていて、環境が違えば、違う音が出るものです。

弦楽器職人による定期点検もとても有効です。例えば、駒の位置の確認や、楽器を安定させるには常に適切な接着が施されていることが重要なので、接着箇所とひび割れの確認等を行います。また、専門家によるクリーニングは、主に演奏中に手や顎が触れる部分などニスが消耗している箇所がないか確認するために必要です。消耗していれば、ニスを塗り直して木を保護します。

残念なことに事故はこれまでも起こり、これからも起こるでしょう。その際には徹底した修理と修復が必

要です。要するに、楽器が安定していること、演奏が可能であること、そして音のクオリティが担保されるのであれば、オリジナルの状態を維持することに尽きます。これらの素晴らしい芸術作品と対峙する時は、敬意を払いながら、自信をもって柔軟でいることです。

修復作業全般については、弦楽器の修復における優れた先駆者である W.E. ヒル&サンズに心から感謝しています。とても早い段階で W.E. ヒル&サンズがこれらの楽器が持つ非常に大きな価値に気づき、修復に不可欠な数々の技術を開発したことで、これらの名品が残り、今も使うことができるのです。W.E. ヒル&サンズは、高い水準の修復技術を導入し、現代の修復技術もこれが基礎となっています。もちろん、ここ数十年の間に新しい技術も考案されてきましたが、基本的なアイデアや考え方、倫理は変わりません。これからこの素晴らしい音色が生き続けられるよう、可能な限り末永く守っていきましょう！

ヒエロニムス・ケストラー

1955年ミュンヘン生まれ。1972年からドイツの州立楽器製作職業専門学校ミッテンヴァルトにて弦楽器製作を学び、1975年に卒業した。アムステルダムのマックス・メラーの工房にて1977年まで2年間学んだ。ロンドンのチャールズ・ベアーの下で修復師としての修行を1982年まで積んだ。1979年、ミッテンヴァルトでマイスター資格を取得。個人事業主として、1982年にシュトゥットガルトにて、修復、鑑定、古楽器の販売、弦楽器の製作を始めた。これら全ての分野において名声を博し、長年、多くの弟子を工房に迎え入れてきた。彼の優れた見識により、ミッテンヴァルト、クレモナ、アメリカ・ヴァイオリン協会 (VSA)、パリ、ロンドン、チェコ共和国などのコンクール審査員として、また、国際的な専門家協会の招きにより講演者として活躍している。

アネット・ゴラー

1970年ドイツのミュンジンゲン生まれ。1989年に高等学校を卒業した後、クレモナ国際ヴァイオリン製作学校にてヴァイオリン製作を学んだ。卒業後、マッシモ・ネグローニの下、ヴァイオリン製作と簡単な修理の訓練を積んだ。そこで2年間過ごした後、修理と修復に興味を抱いて、1年間、スイスのベールにてマルティーン・デュボッソンの下、大規模修理、調整、保守全般を行う。ひと夏の間、米国のオーバリンにてヴァハケン・ニゴゴシアン、クリストファー・ジェルマン、ケン・マイヤーのワークショップに参加し、1997年からはボストンにてマイヤーの下、修復と音調整の実践を重ねた。2000年にヨーロッパに戻り、現在ヒエロニムス・ケストラーの工房で働いている。

Caring About and Taking Care of World Heritage Instruments

Hieronymus Köstler
Anette Goller

In this little résumé, we would like to write about the necessary daily care of string instruments and give a very basic idea of restoration.

Obviously we are not talking about the average instrument - although every instrument should be treated well - but about the most outstanding violins, violas and cellos made centuries ago and having lasted until today, being the peak of violinmaking: Stradivari, of course, together with other most outstanding makers, such as Guarneri del Gesù, the Amati and Guarneri family - to name just a few. We are talking about one of the finest collections of these instruments, the collection of the Nippon Music Foundation. An amazing cultural world heritage of historical, artistic, and functional value, these instruments need to be played by good musicians for maintaining their complete value. They are musical instruments which lose their quality of sound if they are not being played well. This means that violinmakers must satisfy all needs and at the same time try to keep all the instrument's values. In order to save the original, artisanal and artistic value and support the function - as it is not a picture hanging on a wall - it needs to sound good and not to be harmed by the player nor harm the player.

Over centuries and decades, the taste of sound has changed. Therefore, the angle of the neck, the design of the bridge, and the strings have been developed and changed for producing a stronger sound. Not so the body, which remained the same - luckily - that is why we still have these treasures in the present form and condition. In order to guarantee that they survive for many more decades and centuries, we all should do all that we can, starting by daily care and careful use, followed by the most conserving professional maintenance and restoration when necessary. For instance, instruments made by Stradivari have always been valuable. One of the reasons for that is that they have been treated well - always - by players as well as violinmakers.

As for daily care - it is not very difficult: the instruments appreciate clean hands - no perfumes or lotions if possible, they do not want to be touched all over, only at the neck - as far as possible, the rosin should be dusted off and the sweat and saliva taken off right after each use. The player should also be aware of changes in the sound such as extra noises or buzzes, as they could mean that a seam is open. At the same time, one should also be aware of changes in climate - instruments are like people, they have their own moods depending on the climate - although it would be good not to try to have sound adjustments every time they sound different. As the instruments are alive, they have different sounds in different circumstances, as we do as well.

A regular check from the violinmaker is also very helpful, e.g. the checking of the bridge position and checking for cracks as well as the gluing as it is important for its stability that the instrument is always glued properly. Also, a professional cleaning is necessary in order to see

where the varnish has worn off and then replacing it where necessary to protect the wood, mainly at the places where the hand or chin touch the wood while playing the instrument.

Unfortunately, accidents have happened and will happen and when they do, a very thorough repair and restoration is necessary. In a few essential words that means saving all of the original while guaranteeing stability, playability, and sound - all this in a manner of respect towards these wonderful artifacts but at the same time with confidence and an open mind.

Concerning restoration in general, we are most grateful to W. E. Hill & Sons, the leading pioneers in the field of restoring string instruments. From very early on, the Hills have been aware of the huge value of these instruments and they developed a number of indispensable techniques for restoration that have saved these treasures and so allow us to use them still to this day. The Hill family has installed a high standard of restoration on which modern restoration is also based. Of course, additional new techniques have come up in the last decades, but the very basic ideas, thoughts and ethics last. Let us try to keep these incredible voices alive as long as we can!

Hieronimus Köstler

Born in Munich in 1955, Hieronimus Köstler started studying violin making in 1972 at the State School for Instrument Making in Mittenwald, Germany, where he graduated in 1975. For two years he worked in the workshop of Max Möller in Amsterdam till 1977. He continued his training as a violin restorer at Charles Beare's in London till 1982. In 1979, he received his master's degree in Mittenwald. Since 1982, he has been self-employed in Stuttgart as a restorer, expert and dealer for antique instruments and also as a maker of new instruments. He gained a large reputation in all these fields and has had many pupils over the years in his workshop. His professional advice is respected as a juror in competitions such as Mittenwald, Cremona, Violin Society of America (VSA), Paris, London, Czech Republic and as a lecturer worldwide at meetings of professional associations.

Anette Goller

Born in Münsingen, Germany in 1970. After completing high school in 1989, Anette Goller studied violinmaking at the Cremona International Violin Making School. Following her graduation, she trained with Massimo Negroni in the making of new violins and small repairs. After two years there, she became interested in repair and restoration and went to Bale, Switzerland for one year to work for Martine Dubosson, doing major repairs, set-ups and maintenance in general. She had an opportunity to join a summer restoration workshop in Oberlin, USA with Vahakn Nigogosian, Christopher Germain and Ken Meyer, with whom she worked in Boston from 1997 gaining an immense amount of experiences in restoration and sound adjustments. In 2000, she returned to Europe and started to work with Hieronimus Köstler, where she still works.

ストラディヴァリウス

「パガニーニ・クアルテット」

Stradivarius “Paganini Quartet”

アントニオ・ストラディヴァリ (1644-1737) 製作によるヴァイオリン 2 挺、ヴィオラ、チェロで構成されたクアルテットは 6 セットの存在が知られている。このクアルテットはそのひとつであり、19 世紀の伝説的なヴァイオリン奏者、ニコロ・パガニーニ (1782-1840) が、1830 年代に自らの弦楽四重奏団で使用していたことから「パガニーニ・クアルテット」と呼ばれている。1840 年にパガニーニが没した後に散逸してしまったが、ニューヨークの高名な楽器商エミール・ハーマンが 1940 年代に集め直した。この「パガニーニ・クアルテット」は、アントニオ・ストラディヴァリ生誕 300 年とバルトロメオ・ジュゼッペ・ガルネリ没後 200 年を記念して、1945 年にブルックリン美術館で開催された「巨匠たちのヴァイオリン展」に展示された。1946 年にウィリアム A. クラーク米国上院議員の未亡人アンナ E. クラーク夫人がエミール・ハーマンから購入し、演奏家に貸与することを条件として 1964 年にワシントン D.C. にあるコーコラン美術館に寄贈した。その後、このセットはコーコラン美術館から売りに出され、1994 年 2 月、日本音楽財団が購入した。日本音楽財団は、クラーク夫人の意思を尊重して弦楽四重奏団にセットとして貸与している。

This is one of the six remaining sets of quartets compiled with Antonio Stradivari (1644-1737) instruments known to exist today. The name of this quartet derives from Niccolò Paganini (1782-1840), a legendary violinist of the 19th century, who used and played these instruments for his own quartet in the 1830's. After the death of Paganini in 1840, the instruments were separated until Emil Herrmann, a renowned dealer in New York, brought them back together in 1940s. The four instruments were displayed in the exhibition “Fiddles of the Master Craftsmen” at the Brooklyn Museum in 1945, commemorating the 300th anniversary of the birth of Antonio Stradivari and the 200th anniversary of the death of Bartolomeo Giuseppe Guarneri. Mrs. Anna E. Clark, the widow of the U.S. Senator William A. Clark, purchased the quartet from Emil Herrmann in 1946, and in 1964, donated them to the Corcoran Gallery of Arts in Washington D.C., under the condition of loaning them to musicians. Later, the Corcoran Gallery put them on sale, and in February 1994, they were acquired by the Nippon Music Foundation. Succeeding the will of Mrs. Clark, the Foundation loans them to string quartets as a set.



ストラディヴァリウス

1680年製ヴァイオリン「パガニーニ」

Stradivarius 1680 Violin “Paganini”

このヴァイオリンは著名なヴァイオリンのヴィルトゥオーゾ、ニコロ・パガニーニ (1782-1840) が所有していたストラディヴァリ製作による楽器のひとつであり、1727年製ヴァイオリン、1731年製ヴィオラ、1736年製チェロと共に、パガニーニの演奏用に形成されたクアルテットの1挺である。パガニーニの後には、息子のアキレ男爵からパリの楽器商ジャン・バティスト・ヴィヨームが購入し、1867年にアミアンのデサン氏が購入した。1902年にパリの楽器商アルベール・カレッサが入手し、ポアティエのルヴェ氏に売却した。再びアルベール・カレッサがこのヴァイオリンを購入し、1906年、モスクワのピエール・ド・エリセイフに売却した。その後、1922年にボリス・キッチン氏の手に渡り、1925年にニューヨークの楽器商エミール・ハーマンが同氏から購入した。1926年、ハーマンは収集家のデヴィッド H. ウォルトン氏に売却した。1944年、ハーマンはウォルトン氏のコレクション全てと併せて再度このヴァイオリンを購入し、1946年にこのヴァイオリンに加え、1727年製ヴァイオリン、1731年製ヴィオラ、1736年製チェロをニューヨークのアンナ E. クラーク夫人に売却した。クラーク夫人はこのクアルテットをワシントン D.C. にあるコーコラン美術館に寄贈し、日本音楽財団は1994年にこれらを同美術館から購入した。

裏板はカエデの二枚板で、中程度の異なる幅の空目が見られる。横板（側板ともいう）にも幅の異なる空目が見られる。スクロールに使われたカエデの空目はより簡素である。表板のスプルース（マツ科トウヒ属）は主に中程度の異なる幅の木目である。ニスには金色がかかった茶色である。

This violin was one of the Stradivari instruments possessed by the celebrated violin virtuoso Niccolò Paganini (1782-1840) and together with a violin of 1727, a viola of 1731, and a cello of 1736, formed the quartet. After Paganini, the violin was purchased by Parisian dealer Jean-Baptiste Vuillaume from Paganini's son, Baron Achille, and was sold to Mr. Desaint of Amiens in 1867. In 1902, it was bought by Parisian dealer Albert Caressa and sold to Mr. Levers of Poitiers. Albert Caressa acquired the violin again and sold it to Mr. Pierre de Ellisseieff of Moscow in 1906. Subsequently, in 1922, the violin passed into the hands of Mr. Boris Kitchin, from whom it was bought by Emil Herrmann, dealer of New York, in 1925. He then sold it to the collector Mr. David H. Walton in 1926. With his entire collection, Herrmann repurchased the violin in 1944 and sold it, together with the 1727 violin, the 1731 viola and the 1736 cello, to Mrs. Anna E. Clark of New York in 1946. Mrs. Clark donated this quartet to the Corcoran Gallery of Arts in Washington D.C., from which the Nippon Music Foundation acquired the set in 1994.

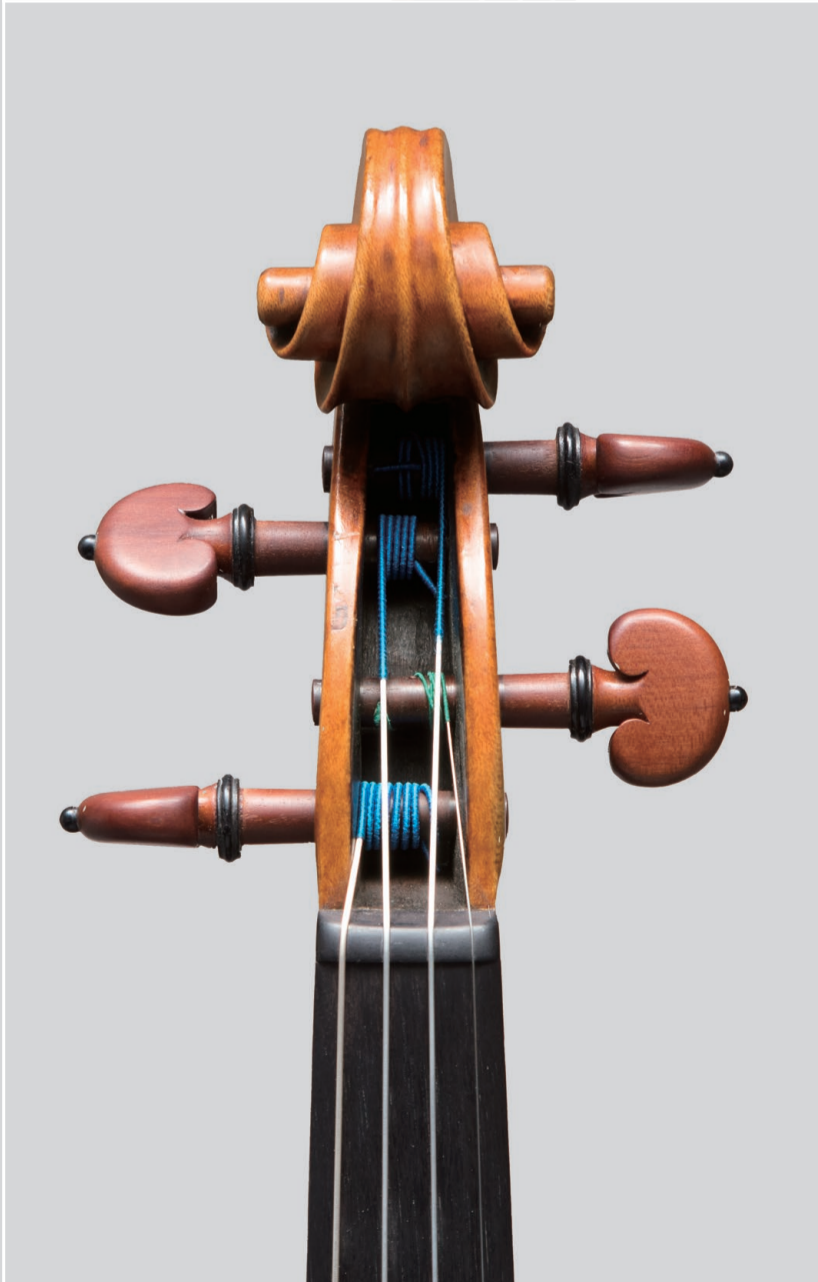
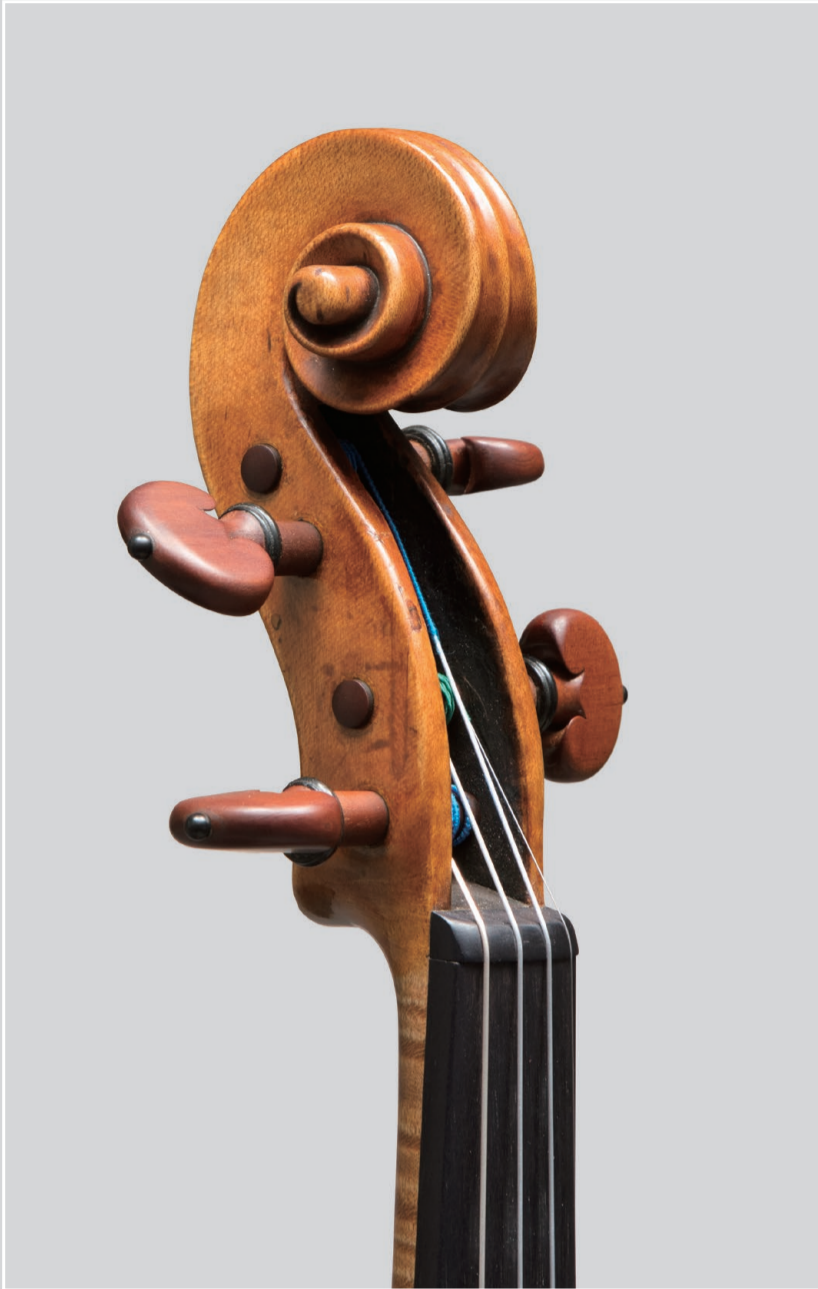
The back is in two pieces of maple marked by a medium irregular curl. The sides are marked by irregular curl. The scroll is of plainer maple. The table is of spruce marked by varying grain mainly of medium width. The varnish is golden brown in color.











ストラディヴァリウス

1727年製ヴァイオリン「パガニーニ」

Stradivarius 1727 Violin “Paganini”

このヴァイオリンの歴史はコジオ・ディ・サラブエ伯爵に遡る。1817年にニコロ・パガニーニ (1782-1840) がこのヴァイオリンを入手した後、息子のアキレ男爵からパリの楽器商ジャン・バティスト・ヴィヨームが購入し、1853年にヴィレレーユ男爵に売却した。1893年頃、このヴァイオリンはテノール歌手でアマチュアのヴァイオリン奏者、そして有名なソプラノ歌手アデリーナ・パッチェ (1843-1919) の夫であるエルネスト・ニコリーニによって購入された。その後、この楽器は1900年にロンドンの楽器商ジョージ・ハートを通してヴァイオリン奏者ヤン・ヴァン・オールドの手に渡ったが、数年後には経済的理由によりハートに売り戻された。1903年、再びハートはヘンリー・サッチ氏に売却し、1909年に買い戻している。ハートは1911年にリヴァプールのブラウン氏に売却した。その後、英国の収集家フレデリック・スミス氏がこの楽器を入手し、W. E. ヒル & サンズに売却した。1914年、この楽器はニューヨークの有名な収集家フェリックス・カーン氏に売却され、1920年にヘレン・ジェフリー氏の手に渡った。1927年に W. R. フォード社が所有した後、1945年にエミール・ハーマンが購入し、1946年にアンナ E. クラーク夫人に売却された。

裏板はカエデの二枚板で、板の継ぎ目から緩やかに下に向かって傾斜した中程度の幅の杓目が見られる。横板には力強く細い杓目が見られる。スクロールには中程度の幅の杓目が見られる。表板のスプルースは明瞭な中程度の幅の木目で、両端に行くほど木目の幅は広い。ニスには赤茶色である。

The history of this violin dates back to Count Cozio di Salabue. In 1817, Niccolò Paganini (1782-1840) obtained this violin, and from his son Baron Achille, Parisian dealer Jean-Baptiste Vuillaume acquired it and then sold it to Comte de Vireille in 1853. In around 1893, the violin was bought by Ernest Nicolini, a tenor and amateur violinist, who was the husband of famous soprano Adelina Patti (1843-1919). It was then passed into the hands of violinist Jan van Oordt in 1900 through George Hart, dealer of London. Owing to financial difficulties, Oordt sold it back to Hart a few years later. Hart sold it again to Mr. Henry Such in 1903 and repurchased it in 1909. He then sold it to Mr. Brown of Liverpool in 1911. Subsequently, English collector Mr. Frederic Smith obtained it and sold it to W. E. Hill & Sons. In 1914, it was sold to renowned collector Mr. Felix Kahn of New York, and in 1920 it passed into the hands of Ms. Helen Jeffrey. After passing ownership by W. R. Ford & Co. in 1927, the violin was purchased by Emil Herrmann in 1945, and sold to Mrs. Anna E. Clark in 1946.

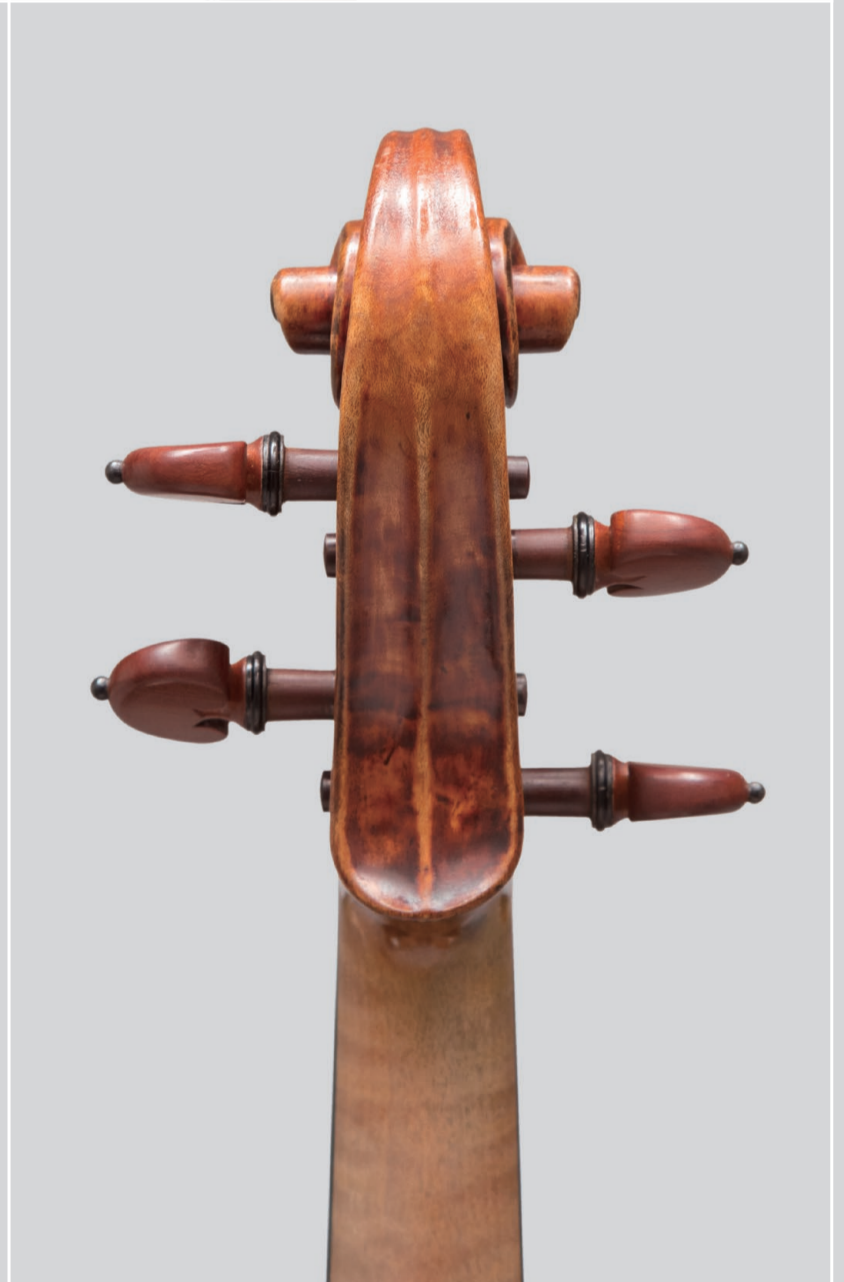
The back is in two pieces of maple, marked by a medium curl, sloping slightly downwards from the center joint. The sides are marked by a strong narrow curl. The scroll is marked by medium curl. The table is of spruce marked by bold medium grain, more open at the flanks. The varnish is reddish brown in color.











ストラディヴァリウス

1731年製ヴィオラ「パガニーニ」

Stradivarius 1731 Viola “Paganini”

現存するアントニオ・ストラディヴァリ作のヴィオラは、12挺が確認されている。18世紀末に楽器商のジョン・ベッツによって英国に持ち込まれ、銀行家で楽器収集家のE. スティーヴンソン氏に売却された。1831年頃、同氏は全てのコレクションを有名な楽器商ジョージ・コーズビーに売り渡した。1832年、ニコロ・パガニーニ(1782-1840)が初めて英国を訪れた際に、ストラディヴァリの楽器でクアルテットのセットを完成させるため、このヴィオラを購入した。彼はこの楽器をとっても気に入り、作曲家の Hector Berlioz (1803-1869) に、自身のためにヴィオラのソロパートのある交響曲を委嘱した。それが「イタリアのハロルド」である。パガニーニの死後、息子のアキレ男爵がこのヴィオラをパリの楽器商ジャン・バティスト・ヴィヨームに売却し、次に、1853年、ヴィヨームは英国の音楽愛好家のオットー・ブース氏に売却した。同氏はこのヴィオラを入手したことにより、ストラディヴァリウスのクアルテットを形成した。このヴィオラは1884年にW.E. ヒル & サンズの所有となり、1892年にクヌープ男爵の手に渡った。同年、ロベルト・フォン・メンデルスゾーン氏は、ヴァイオリン奏者ヨーゼフ・ヨアヒム(1831-1907)の助言により、かのヨアヒム四重奏団の演奏用にこのヴィオラを購入した。このヴィオラは1944年にエミール・ハーマンに売却され、その後、1946年にアンナ E. クラーク夫人に売却された。

裏板はカエデの一枚板で、右上に向かって傾斜した力強い中程度の幅の空目が見られる。横板には細い空目が見られる。スクロールにはほとんど空目は見られない。表板のスプルースは、力強い、主に小幅の木目である。ニスには金色がかかったオレンジと茶の間色である。

This is one of the twelve remaining violas made by Antonio Stradivari known to exist today. It was brought to England in the late 18th century and sold by the dealer John Betts to Mr. E. Stephenson, banker and owner of a collection of instruments. In around 1831, he passed his entire collection into the hands of well-known dealer George Corsby. In 1832, Niccolò Paganini (1782-1840), during his first visit to England, bought the viola to complete a Stradivari quartet. He was so enamored of the instrument that he commissioned composer Hector Berlioz (1803-1869) to write a symphony for him in which the viola has a solo part, “Harold en Italie” was the result. After the death of Paganini, his son, Baron Achille, sold the viola to Parisian dealer Jean-Baptiste Vuillaume who in turn sold it to Mr. Otto Booth in 1853, an English musical enthusiast who, with the acquisition of this viola, completed a quartet of Stradivarius. The viola was acquired by W. E. Hill & Sons in 1884 and by Baron Knoop in 1892. In the same year, Mr. Robert von Mendelssohn bought the viola on the advice of violinist Joseph Joachim (1831-1907) so that the viola would be played in the famous Joachim Quartet. The viola was purchased by Emil Herrmann in 1944, and sold to Mrs. Anna E. Clark in 1946.

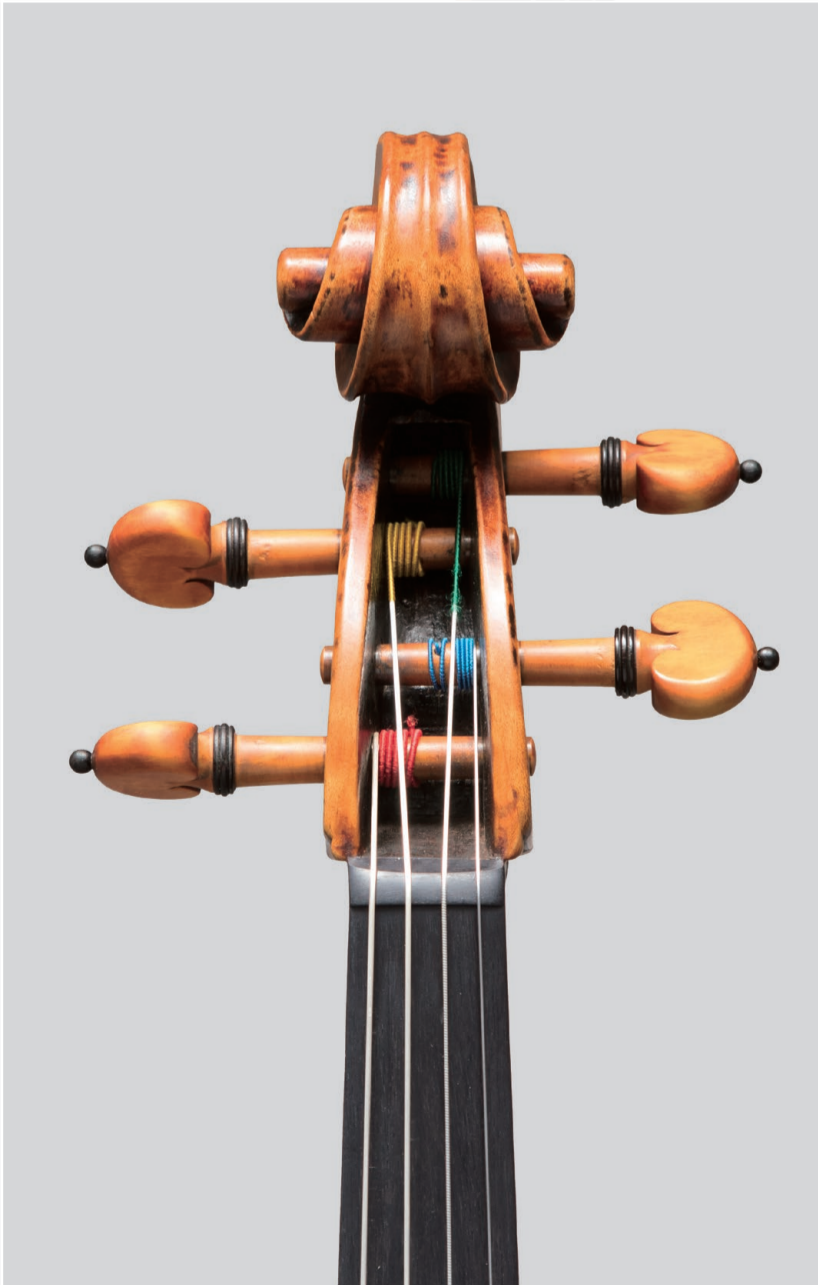
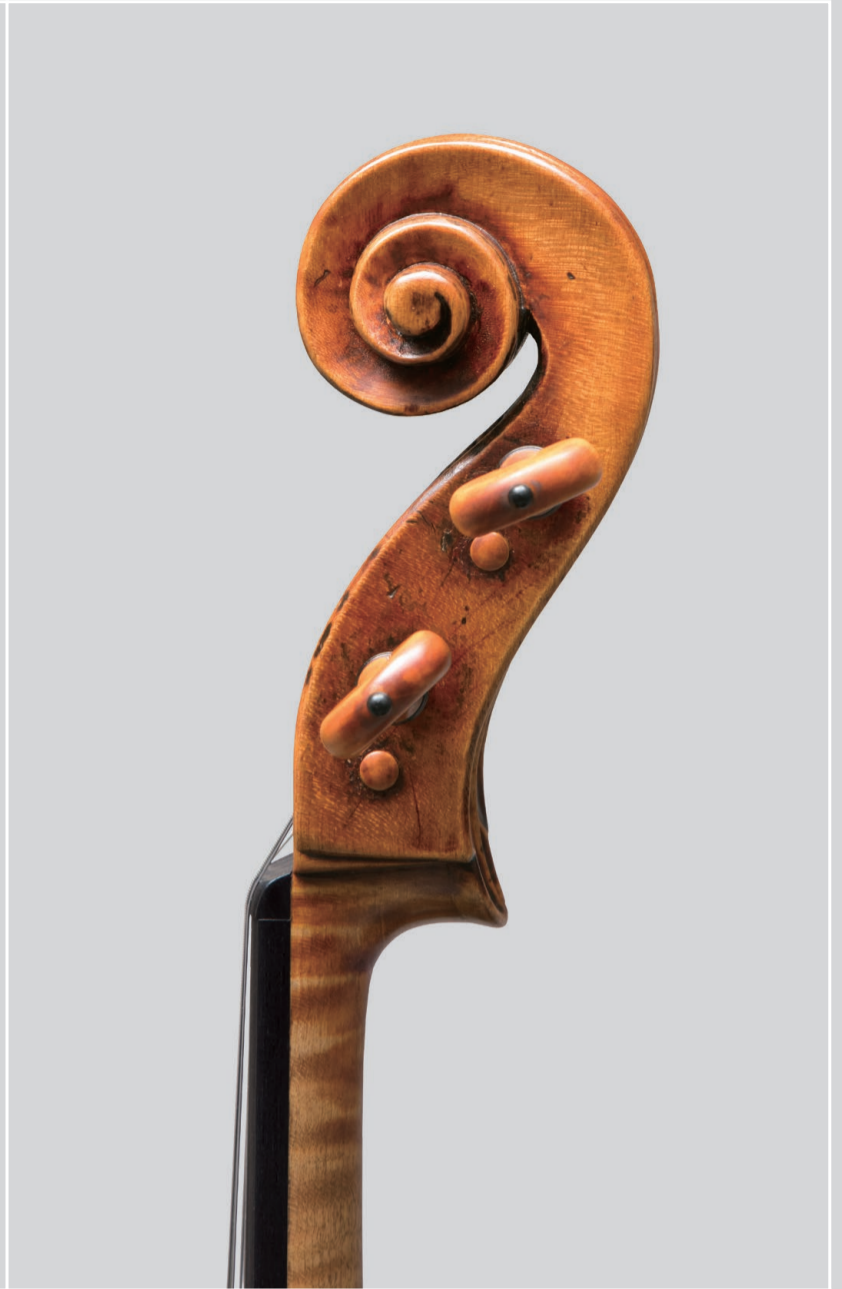
The back is in one piece of maple, marked by a strong medium curl ascending to the right. The sides are marked by a smaller curl. The scroll is almost plain. The table is of spruce marked by strong, mainly fine grain. The varnish is golden orange brown in color.











ストラディヴァリウス

1736年製チェロ「パガニーニ」

Stradivarius 1736 Cello “Paganini”

このチェロは1840年にパリの楽器商ジャン・バティスト・ヴィヨームからドイツのアマチュア奏者レミーレ氏の手に入り、彼の死後、ヴロス・フォン・アムステル氏に売却された。1875年、シュトゥットガルトのクルムホルツ氏の元に渡った。1876年頃に同氏が死去した後、フランクフルトの美術商カイザーがこの楽器を入手し、収集家のC.G.マイヤー氏に売り渡した。1877年、同氏はフランクフルト市議会議員のエルネスト・ラーデンプルク氏に売却した。1895年、ラーデンプルク氏からロベルト・フォン・メンデルスゾーン氏に売却され、その後、メンデルスゾーン家の所有となった。著名な楽器商エミール・ハーマンは1944年頃にこのチェロを入手し、1946年にアンナ E. クラーク夫人に売却した。

裏板はカエデの二枚板で、美しく、細く、水平な杓目が見られる。横板にはとても力強い、細い杓目が見られる。スクロールにはほとんど杓目は見られない。表板のスプルースは、中心は中程度の幅の木目であり、両端に行くほど木目の幅は広い。ニスには暗い赤茶色である。

In 1840, this cello was sold from Parisian dealer Jean-Baptiste Vuillaume to a German amateur named Mr. Lemire and after his death bought by Mr. Vloss von Amstel. In 1875, it was passed to Mr. Krumbholz of Stuttgart. After his death in about 1876, an art dealer in Frankfurt named Kaiser acquired it and passed it on to the collector Mr. C. G. Meier of London. In 1877, he sold it to Mr. Ernest Ladenburg, councillor of Frankfurt, who in turn sold it to Mr. Robert von Mendelssohn in 1895, after which it remained in the possession of the Mendelssohn family. Renowned dealer Emil Herrmann obtained this cello in around 1944 and then sold it to Mrs. Anna E. Clark in 1946.

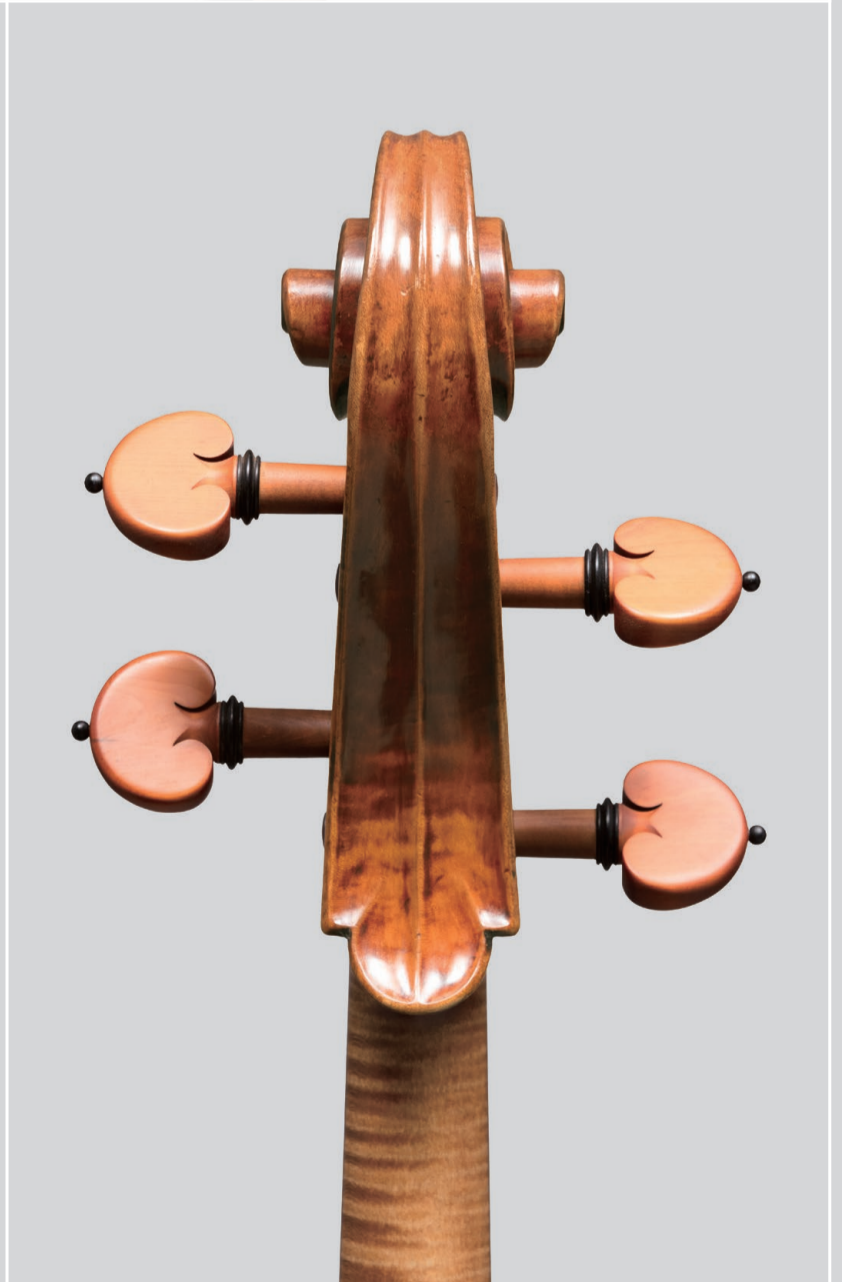
The back is in two pieces of maple marked by a handsome small horizontal curl. The sides are marked by a very strong small curl. The scroll is of almost plain maple. The table is of spruce marked by medium grain at the center, opening towards the flanks. The varnish is dark red-brown in color.











ストラディヴァリウス

1700年製ヴァイオリン「ドラゴネッティ」

Stradivarius 1700 Violin “Dragonetti”

このヴァイオリンは、イタリアの著名なコントラバス奏者ドメニコ・ドラゴネッティ（1763-1846）によって大切に所有されていたことから、この名前と呼ばれている。この楽器は、英国の楽器商ジョン・ベッツによってイタリアから英国に持ち込まれ、1818年にアマチュア奏者として知られていたF.V. リヴァス氏の手に渡った。同氏は他にも複数の名器を所有していた。1835年にF. ドゥ・ルジュモン氏の手に渡り、次に、小説家で、熱心なヴァイオリン収集家でもあったチャールズ・リードの元へ渡った。1852年にチープサイドのアルヴェイ・ターナー氏からバシャール氏の手に渡り、1910年に英国の楽器商W.E. ヒル&サンズに買い取られるまで、同家によって保管されていた。20世紀に最も有名なイタリア製弦楽器コレクションを形成したリチャード・ベネット氏の手に1912年に渡ったが、1926年にはこの楽器を含めた同氏のコレクション全てがW.E. ヒル&サンズに託されることになる。このヴァイオリンは、1958年に英国のバースで行われたアート展覧会に、W.E. ヒル&サンズのコレクションを象徴する楽器として展示された。1963年にはヴァイオリン奏者のアルフレード・カンポリ（1906-1991）の手に渡り、次いで1988年にオリヴィエ・ジャック氏の元に渡った。その後、西ドイツ銀行の所有となり、著名なヴァイオリン奏者フランク・ペーター・ツィンマーマンに貸与された。日本音楽財団は2002年6月に西ドイツ銀行からこの楽器を購入した。

裏板はカエデの一枚板で、右上に向かって傾斜した中程度の幅の美しい空目が見られる。横板とスクロールにも同様の空目が見られる。表板はスプリュースの二枚板で、中心の木目は極めて細く、両端に行くほど木目の幅は広い。ネックは製作当時のもので、踵部分に二つの黒い釘跡が見られるのは、バロック時代、ネックを横板に固定し、補強するために金属の釘が用いられたためである。ニスには温かい色合いの金色がかかったオレンジ色である。

The name of this violin was taken from Domenico Dragonetti (1763-1846), a distinguished Italian virtuoso double bass player, who kept it with great care. It was brought from Italy to England by the English dealer John Betts, and in 1818, it was passed to Mr. F. V. Rivas, a well-known amateur player in England of his time, who also owned other fine instruments. In 1835, it passed into the hands of Mr. F. de Rougemont, and was subsequently bought by the novelist Charles Reade, a keen violin collector. In 1852, it was sold by Mr. Alvey Turner of Cheapside to Mr. Bashall and it remained in his family until it was purchased by W. E. Hill & Sons of England in 1910. In 1912, it passed into the hands of Mr. Richard Bennett, who possessed the most famous collection of Italian instruments of the 20th century. In 1926, he disposed of his entire collection to W. E. Hill & Sons. In 1958, it was exhibited at the Exhibition of Antique Art Treasures held in Bath, England, representing the instruments owned by W. E. Hill & Sons. In 1963, it passed into the hands of violinist Alfredo Campoli (1906-1991), and then to Mr. Olivier Jacques in 1988. It was subsequently possessed by Westdeutsche Landesbank Girozentrale (WestLB), which loaned the instrument to celebrated violinist Frank Peter Zimmermann. Nippon Music Foundation acquired this instrument from WestLB in June 2002.

The back is in one piece of maple, marked by a handsome medium curl ascending to the right, that of the sides and scroll being similar. The table in two pieces of spruce is marked by very fine grain at the center, becoming more open towards the flanks. The neck is still original and has two black nail marks above the heel. In the Baroque period, necks were glued onto the ribs and held in place with metal nails for extra strength. The varnish is warm golden orange color.











ストラディヴァリウス

1702年製ヴァイオリン「ロード・ニューランズ」

Stradivarius 1702 Violin “Lord Newlands”

このヴァイオリンは、英国のニューランズ卿（1825-1906）によって生涯大切にされていたことから、この名前と呼ばれている。この楽器はフランスのアマチュア奏者ウィッターリン氏によって長い間大切にされていたが、1876年に同氏が死去すると、ガン&ベルナルデルに買い取られ、1877年に有名な楽器商デヴィッド・ローリーに売却された。同年、同氏によってスコットランドに持ち込まれ、アマチュア奏者のウィリアム・クロール氏に売却された。クロール氏はこのヴァイオリンを1884年頃まで所有し続け、再びローリーの元に戻している。その後、この楽器は、ホージェ大佐、後のニューランズ卿に売却された。ニューランズ卿は生涯この楽器を保有し、死後は息子に受け継いだ。その後、アマチュア奏者のR.E.ブランド氏に売却され、同氏からW.E.ヒル&サンズに買い取られ、1921年にローダ・バックハウス嬢に売却された。その後1961年にW.E.ヒル&サンズによって買い戻され、1962年にダンバー氏の手に渡ったが、1964年には再びW.E.ヒル&サンズの元に戻されている。1982年、厳選された名器から成るコレクションを所有していたスハイルS.サバ氏に売却された。このヴァイオリンは、W.E.ヒル&サンズの所有する楽器の象徴として、1973年に英国バースで開催された古楽器名器展示会に出品された。日本音楽財団は2002年6月にエドモントン（ミュージック）社からこの楽器を購入した。

裏板はカエデの一枚板で、右上に向かって傾斜した美しい幅の異なる空目が見られる。横板とスクロールにも同様の空目が見られる。表板のスプリースの木目は、中心は細く、両端に行くほど幅はより広い。ニスにはオレンジがかった鮮やかな黄金色である。

The name of this violin was taken from the ownership by Lord Newlands (1825-1906) of England who kept it throughout his life with great care. This instrument belonged for many years to a French amateur Mr. Wittering. Upon his death in 1876 it was purchased by Gand et Bernardel and then sold to the well-known dealer David Laurie in 1877 and was brought to Scotland and sold to an amateur player Mr. William Croall. Mr. Croall retained the violin until around 1884 when it again passed into the hands of Laurie. It was then sold to Colonel Hozier, who subsequently became Lord Newlands. Lord Newlands kept the violin until his death when it passed to his son. It was then acquired by an amateur, Mr. R. E. Brandt, from whom W. E. Hill & Sons obtained the violin and sold it in 1921 to Miss Rhoda Backhouse. In 1961, the violin was re-acquired by W. E. Hill & Sons and offered to Mr. Dunbar in 1962, but returned to W. E. Hill & Sons in 1964. In 1982, it was sold to Mr. Suhail F. Saba, who was the owner of a very select collection of fine violins. In 1973, it was exhibited at the CINOVA Exhibit, Assembly Rooms in Bath, England, representing the instruments owned by W. E. Hill & Sons. In June 2002, Nippon Music Foundation acquired this instrument from Edmonton (Music) Limited.

The back is in one piece of maple, marked by a handsome irregular curl ascending to the right. That of the sides and scroll are similar. The table of spruce is marked by fine grain at the center, more open towards the flanks. The varnish is a rich gold color with an orange tint.











ストラディヴァリウス

1708年製ヴァイオリン「ハギンス」

Stradivarius 1708 Violin “Huggins”

このヴァイオリンは英国の有名な天文学者サー・ウィリアム・ハギンス (1824-1910) が所有していたことから「ハギンス」と呼ばれている。1870年代後半にウィーンの T. ザック氏がフランスから入手し、1880年頃、同氏から英国の W.E. ヒル & サンズの手に移り、1882年にサー・ウィリアムに売却された。彼は生涯にわたりこの楽器を所有し続け、死後は、未亡人がこの楽器を売却し、W.E. ヒル & サンズが再び所有することとなった。次いで、W.E. ヒル & サンズから著名なアマチュア奏者で収集家のリチャード・ベネット氏に売却された。1919年には W.E. ヒル & サンズの手に戻り、同年、著名な収集家フェリックス・カーン氏に売却された。1924年、カーン氏はこの楽器をニューヨークのルドルフ・ウーリッツァー社に売却し、同年、ブエノスアイレスで名器を多数所有していた収集家グスタボ・エルテン氏が購入した。その後、ズラコ・バロコヴィク氏がこの楽器を購入した。1931年、このヴァイオリンは楽器商エミール・ハーマンからニューヨークのチャールズ・ペチェック氏に売却された。1990年、ペチェック氏の相続人からソリストとして有名なチョー・リャン・リンがこのヴァイオリンを購入し、それ以来、演奏会及び録音で使用した。日本音楽財団は1995年3月にこの楽器を購入した。

裏板はカエデの一枚板で、右下に向かって傾斜した中程度の幅の美しい杓目が見られる。横板にも同様の杓目が見られる。スクロールにはやや控えめの杓目が見られる。表板はスプリュースの二枚板で、木目は、中心は細く、両端に向かって僅かに広がり、波線を描いている。ニスには鮮やかなオレンジ色である。

The name of this violin is derived from the well-known English astronomer Sir William Huggins (1824-1910) who once possessed it. This instrument was previously obtained from France in the late 1870's by Mr. T. Zack of Vienna, and from him, it was brought to W. E. Hill & Sons of England in around 1880, then sold to Sir William Huggins in 1882. He retained it until his death and it was re-purchased by W. E. Hill & Sons from his widow. It was then sold to Mr. Richard Bennett, a well-known amateur and collector. It returned to W. E. Hill & Sons in 1919 and was sold to a renowned collector Mr. Felix Kahn in the same year. In 1924, Mr. Kahn sold the violin to Rudolph Wurlitzer Co. in New York, and in the same year it was purchased from them by Mr. Gustavo Herten of Buenos Aires, a well-known collector who owned a number of fine instruments. After Mr. Herten, the violin was bought by Mr. Zlatko Balokovic. In 1931, this violin was sold to Mr. Charles Petschek of New York from the dealer Emil Herrmann. In 1990, the well-known soloist Cho-Liang Lin purchased it from the heirs of Mr. Petschek and he had since used this violin for concerts and recordings. Nippon Music Foundation purchased this instrument in March 1995.

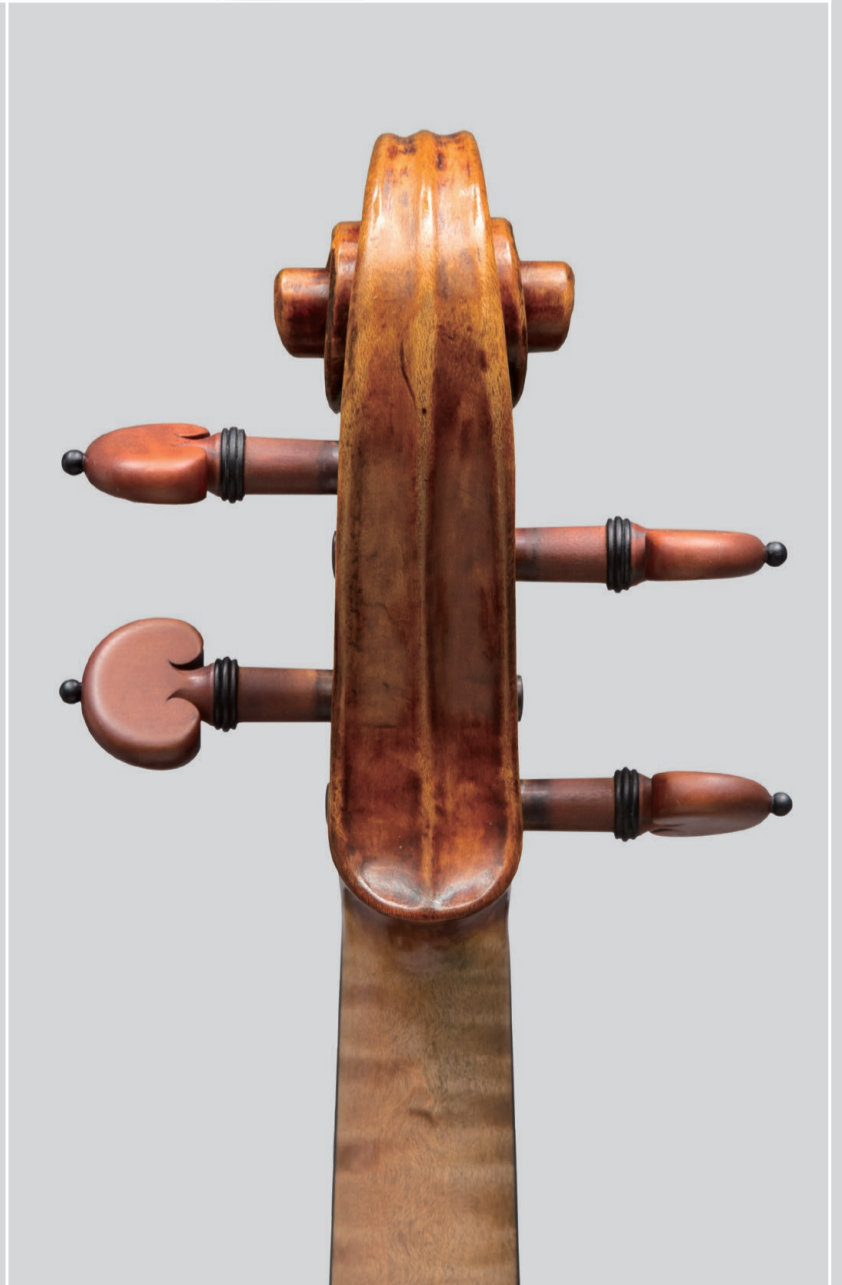
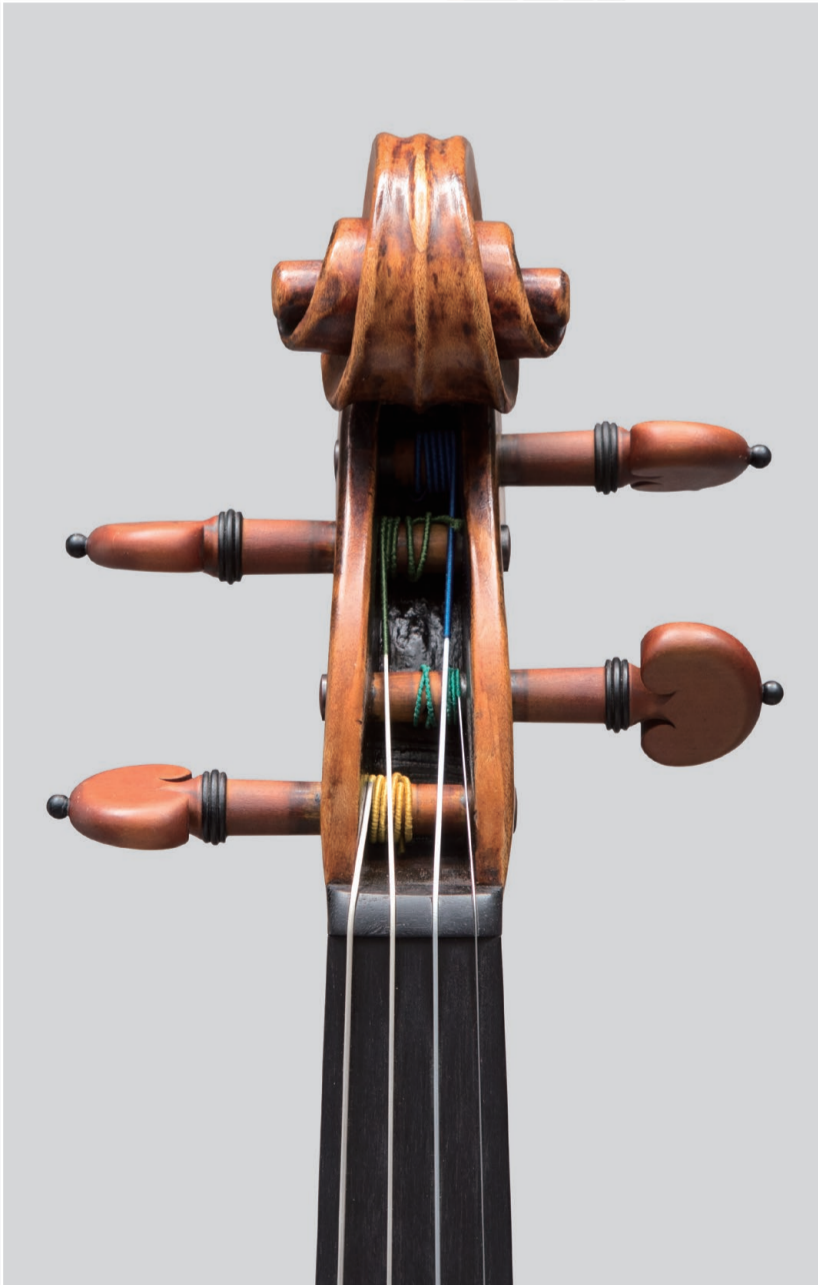
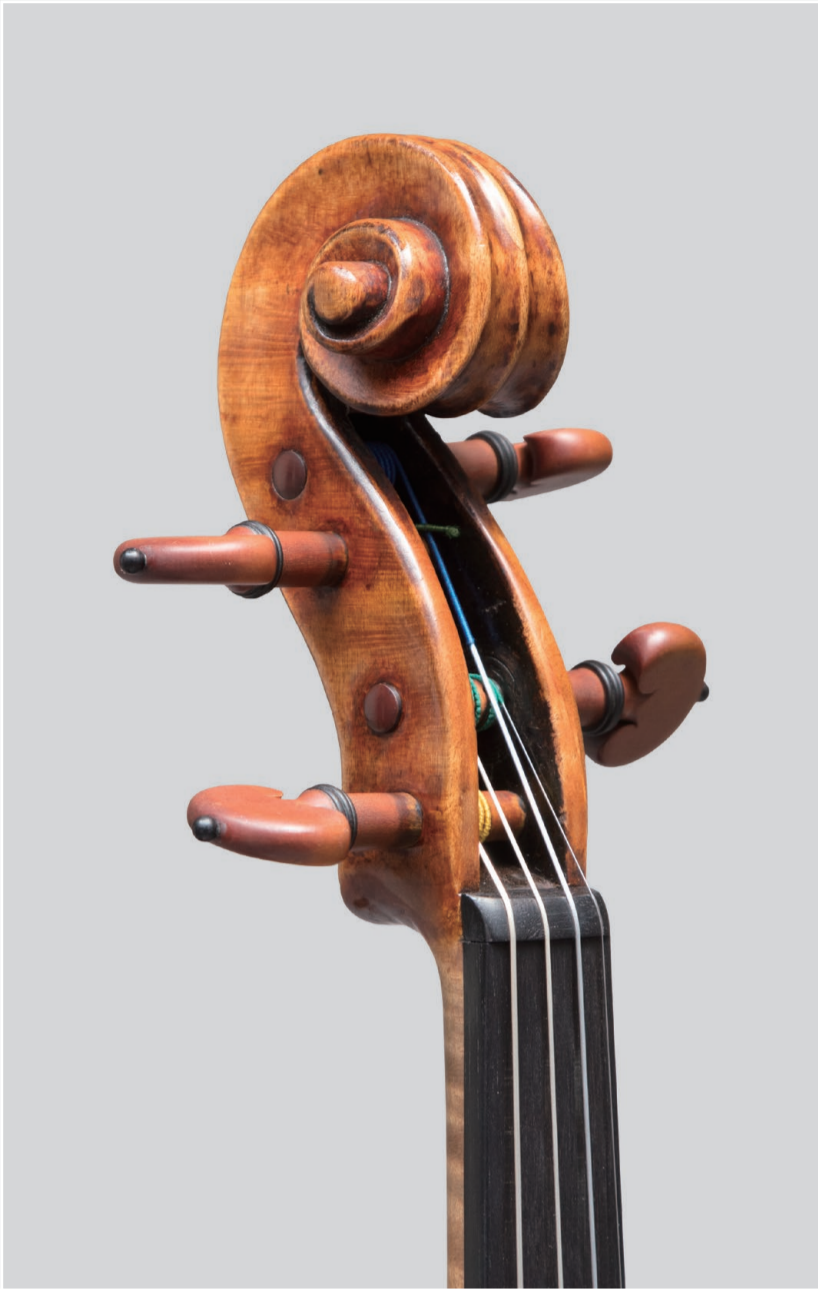
The back is in one piece of maple with a handsome medium-broad curl descending to the right. The sides are similarly marked. The scroll being of maple is of less pronounced curl. The table in two pieces of spruce is marked by fine grain at the center becoming more open and slightly wavy towards the flanks. The varnish is of a rich orange color.











ストラディヴァリウス

1709 年製ヴァイオリン「エンゲルマン」

Stradivarius 1709 Violin “Engleman”

このヴァイオリンの名前は、前の所有者である米国の臨床学教授エフレイム P. エンゲルマン博士 (1911-2015) に由来し、同氏はアマチュア奏者及び楽器の収集家でもあった。このヴァイオリンは約 150 年間ヤング家で受け継がれており、最後の所有者であった米国海軍士官ヤング中佐が第二次世界大戦で死亡した後は、弾かれることなく彼の両親によって生涯保管されていた。後にこのヴァイオリンは英国の W.E. ヒル&サンズの元に渡り、1951 年にフランスのアマチュア奏者ピエール・ラコンブ博士 (医学) に売却された。次にこの楽器は、ニューヨークの楽器商ジャック・フランセを通してエンゲルマン博士に売却された。日本音楽財団は 1996 年 5 月にこのヴァイオリンをエンゲルマン博士から購入した。

裏板は美しいカエデの一枚板で、右下に向かって僅かに傾斜した小幅の杓目が見られる。横板にも同様の杓目が見られる。スクロールにはより幅広の淡い杓目が見られる。表板はスプリュースの二枚板で、木目は、中心は細く、両端に行くにつれより幅広になっている。鮮やかなオレンジと茶の中間色のニスがふんだんに楽器全体を覆っている。

This violin is named “Engleman” after its previous owner Dr. Ephraim P. Engleman, M. D. (1911-2015) of America, Clinical Professor of Medicine, amateur violinist and instrument collector. The violin had been possessed for nearly 150 years by the Young family. After the death of the last successor U.S. Naval officer Commander Young in World War II, it was kept unused by his parents throughout their lifetime. The violin was then passed into the hands of W. E. Hill & Sons of England, who then sold it to a French amateur Dr. Pierre Lacombe M. D. in 1951. It then passed via Jacques Français, a dealer of New York to Dr. Engleman in 1986. Nippon Music Foundation acquired this violin from Dr. Engleman in May 1996.

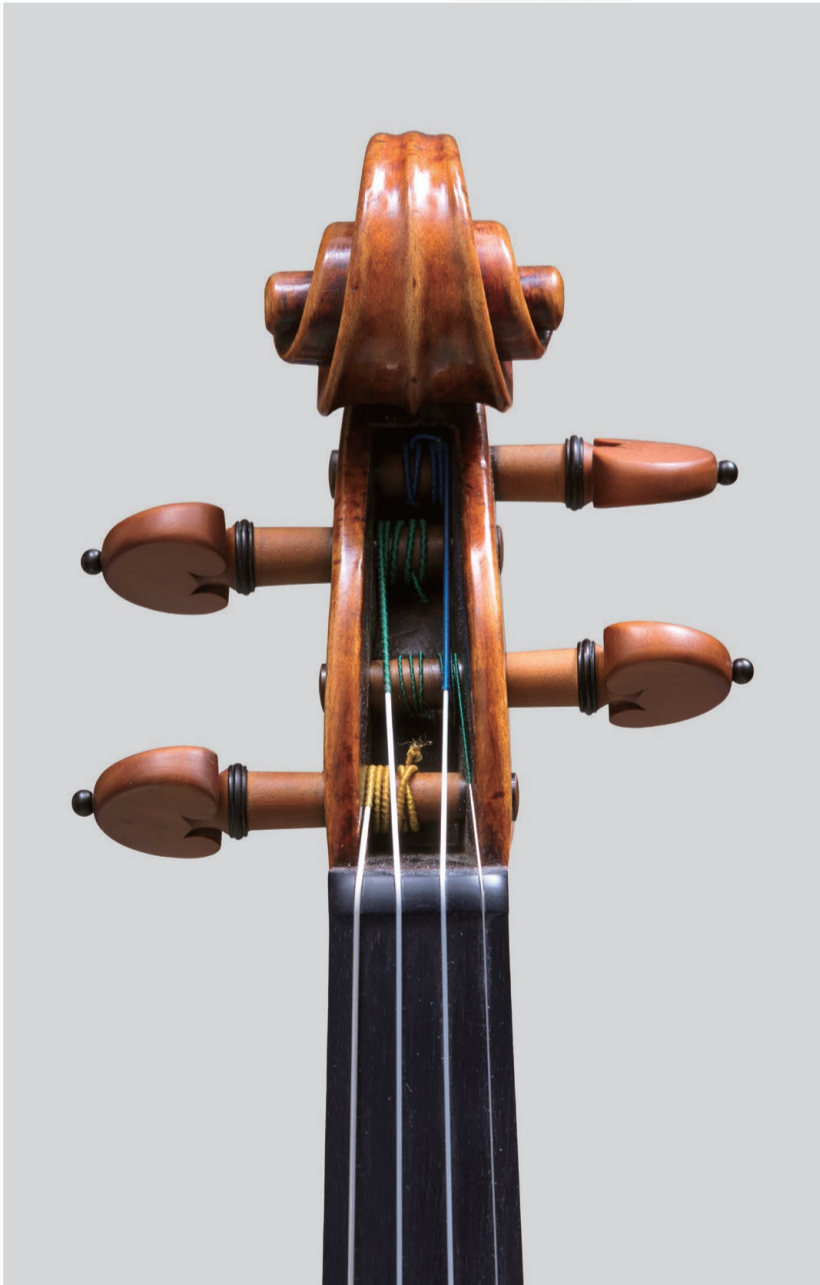
The back, in one piece, is of handsome maple marked by a small curl slanting slightly down to the right. That of the sides is similar. The scroll is marked by a broader and fainter curl. The table is in two pieces of spruce of very fine grain at the center, broadening significantly at the flanks. The instrument is well covered with varnish of a rich orange-brown color.











ストラディヴァリウス

1710年製ヴァイオリン「カンポセリーチェ」

Stradivarius 1710 Violin “Camposelice”

このヴァイオリンは、フランスのカンポセリーチェ公爵が所有していたことからこの名前と呼ばれている。彼は優れたアマチュア奏者で、名器の収集家でもあった。カンポセリーチェ公爵は1884年頃、フランスの地方に住むアマチュア奏者トージアが所有していたこの楽器を、パリのガン&ベルナルデルを通して購入した。1889年 W.E. ヒル&サンズは侯爵夫人からこのヴァイオリンを買い取り、翌年に、アマチュア奏者でもあった、英国ベッドフォードシャー在住のジョン・オードリー・ハーヴィー艦長に売却した。1894年、ボストンのイザベラ・スチュワート・ガードナー美術館を創立したL.J. ガードナー夫人に売却され、次に、作曲家でヴァイオリン奏者のチャールズ・マーティン・レフラー（1861-1935）の手に渡り、1927年まで使用及び保管された。1929年、このヴァイオリンはニューヨークのルドルフ・ウーリッツァー社を通してシカゴのラルフH. ノートン氏の手に渡った。1930年、ニューヨークの弦楽器商の重鎮エミール・ハーマンを通して、ストラディヴァリウスのクアルテットを所有していたキューネ博士の手に渡り、1937年、権威あるクレモナの古楽器名器展でキューネ博士のコレクションとして展示された。その後、チェコのヴァイオリン奏者ヴァーシャ・プルシーホダ（1900-1960）が1949年までに所有し、1968年にはバーナード・ゴールドブラット氏が所有していた。1977年にJ&A ベアアからジョセフ・ドゥリエージュ氏に売却され、20世紀後半にはベルギーのアマチュア奏者の手に渡り、亡くなるまでの30年間保管されていた。日本音楽財団は2004年9月に同氏の相続人からこの楽器を購入した。

裏板は美しいカエデの二枚板で、板の継ぎ目から下に向かって傾斜した幅広の杓目が見られる。横板にも同様の杓目が見られる。スクロールにはより整った杓目が見られる。表板は良質のスプルースで、木目は、中心は細く、両端に行くほど幅は広い。ニスにはオレンジと赤の中間色である。楽器の内側はオリジナルの状態が保たれている。

The name of this violin is derived from the Duke of Camposelice of France, who was an excellent amateur and formed a fine instrument collection. This violin belonged to an amateur player named Tauzia living in provincial France from whom the Duke of Camposelice purchased it in around 1884 via Gand et Bernardel of Paris. In 1889, W. E. Hill & Sons purchased this violin from the Duchess, and in the following year sold it to an amateur, Captain John Audley Harvey residing in Bedfordshire, England. In 1894, the violin was sold to Mrs. J. L. Gardner, who founded the Isabella Stewart Gardner Museum in Boston, and from her, it passed into the hands of the composer and violinist Charles Martin Loeffler (1861-1935) who played and kept the violin until 1927. In 1929, the violin passed into the hands of Mr. Ralph H. Norton of Chicago through Rudolph Wurlitzer Co. of New York. In 1930, via prominent dealer Emil Herrmann in New York, it went to Dr. Kühne who owned a collection of Stradivarius quartet. In 1937, this violin was exhibited at the prestigious Cremona Exhibition of Instruments as part of Dr. Kühne's collection. After Dr. Kühne, it was in the possession of a Czech violinist Váša Příhoda (1900-1960) by 1949, and then of Mr. Bernard Goldblatt in 1968. It was then sold to Mr. Joseph Deliège in 1977 by J & A Beare Ltd. Later in the 20th century, it passed into the hands of a Belgian amateur player who kept it for over thirty years until his death. It is from his heir that Nippon Music Foundation acquired this instrument in September 2004.

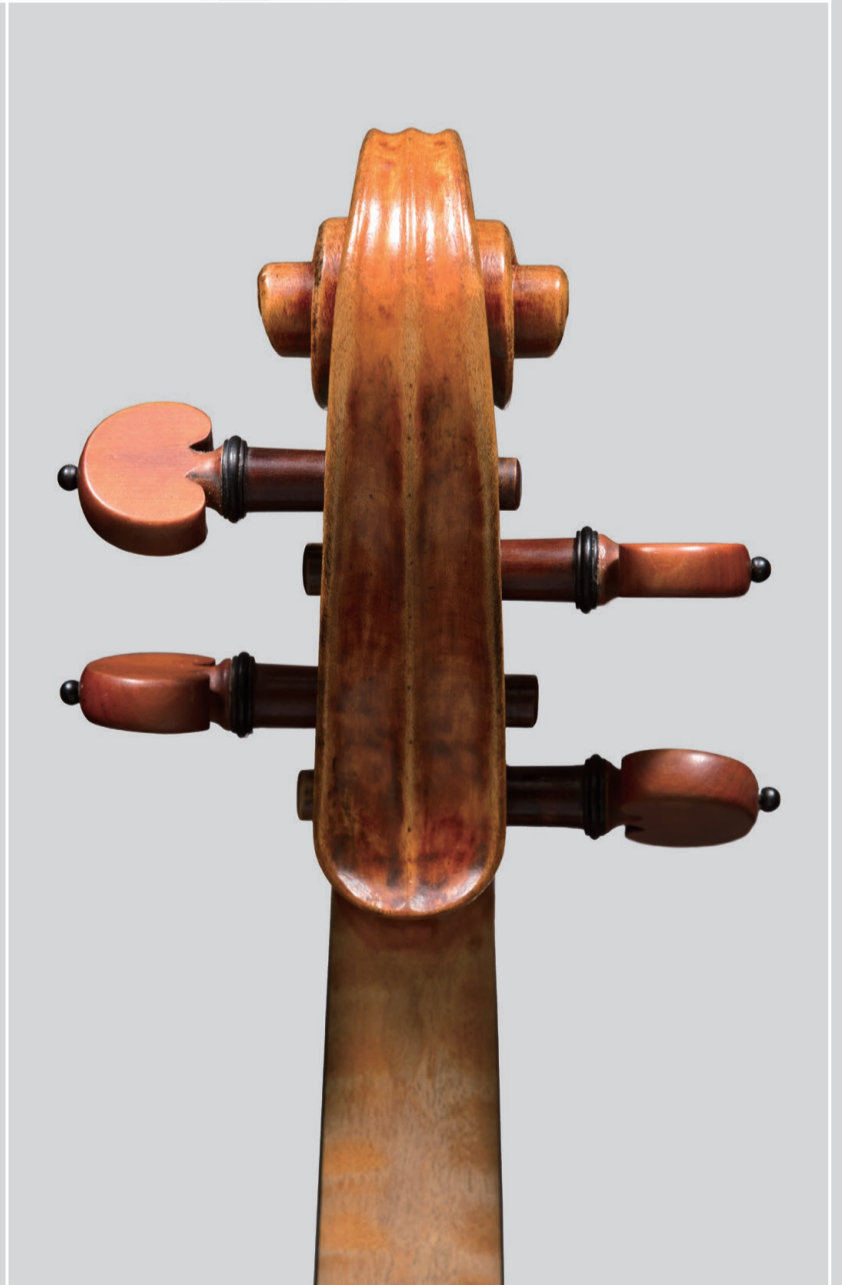
The back, in two pieces, is of handsome maple marked by a broad curl slanting downwards from the joint. That of the sides is similar. The scroll is with more regular curl. The table is of excellent spruce, the grain is narrow at the center and opening out at the flanks. The varnish is of an orange-red color. The internal condition is original and untouched.











ストラディヴァリウス

1714年製ヴァイオリン「ドルフィン」

Stradivarius 1714 Violin “Dolphin”

光沢の美しい裏板のニスと華麗な見栄えは、まるで優美なイルカが光り輝いている様を思わせることから、1860年代後半にこのヴァイオリンを所有していたロンドンの楽器商ジョージ・ハートによって「ドルフィン」と名付けられ、以来、この名で呼ばれている。1862年、有名なアマチュア奏者のC.G.マイヤー氏はこのヴァイオリンをパリの楽器商ジャン・バティスト・ヴィヨームから購入し、1868年にジョージ・ハートに売却した。1875年に著名な収集家ジョン・アダム氏に売却され、1881年から1882年に、同氏のその他のコレクションと共に、当時世界的に活躍していた楽器商デヴィッド・ローリーに託された。1882年、アマチュア奏者で収集家でもあったボルトン在住のリチャード・ベネット氏に売却された。1892年、ベネット氏からこのヴァイオリンを入手したW.E.ヒル&サンズはライオネル・ウォーカー・マンロー氏に売却し、同氏から買い戻した後、優れたアマチュア奏者であったA.N.ストザート夫人に売却した。同夫人は1915年までこの楽器を所有し続けた。1915年、W.E.ヒル&サンズはこのヴァイオリンを再び買い取り、以前の所有者であったリチャード・ベネット氏に売却した。1926年、ドルフィンを含む同氏のコレクションが手放されることになり、1935年、有名なビスケット製造会社を営んでいたジョージ・ケンプ氏の手に移った。1950年にヴァイオリンのヴィルトゥオーゾ、ヤッシャ・ハイフェッツ(1901-1987)の手に移り、その後、ヘンリー・ホットィンガー氏のコレクションとして保管された。このヴァイオリンは1970年から香港出身で英国在住のチョー・ミン・シン氏によって大切に保管されていた。日本音楽財団は2000年2月にこの楽器を購入した。

裏板は非常に美しいカエデの二枚板で、板の継ぎ目から上に向かって傾斜した幅の大きく異なる杓目が見られる。横板は中程度の幅の杓目が見られる。スクロールにはぼんやりとした杓目が見られる。表板は厳選されたスプリュースの二枚板で、中程度の幅の木目は極めて均等であるが、両端はやや幅広である。ニスは鮮やかなオレンジと赤の中間色である。ストラディヴァリの黄金時代の代表作として、W.E.ヒル&サンズ発行の書物には、1715年製「アラード」、1716年製「メシア」と並んで言及されている。

The striking appearance and the rich varnish on the back of the violin was likened to the brilliant and changing colors of the graceful dolphin. It was named by George Hart, a violin dealer in London, who owned the violin in the late 1860's. Since then, the violin has been called by the name of “Dolphin”. This violin was purchased by the well-known amateur player Mr. C. G. Meier in 1862 from Parisian dealer Jean-Baptiste Vuillame. In 1868, he sold the violin to George Hart. In 1875, it was sold to a well-known collector Mr. John Adam, who, among his other collections, in 1881-1882, disposed of it to David Laurie, the foremost international dealer of the day. In 1882, the violin was sold to Mr. Richard Bennett of Bolton, a collector as well as an amateur. In 1892, W. E. Hill & Sons acquired the violin from Mr. Bennett and then sold it to Mr. Lionel Walker Munro, bought it back from him, and then sold it to an excellent amateur player Mrs. A. N. Stothert, who retained it until 1915. In 1915, W. E. Hill & Sons re-purchased the violin and it returned to its previous owner, Mr. Richard Bennett. He disposed of his collection including “Dolphin” in 1926, and in 1935 it passed into the hands of Mr. George Kemp, Director of the well-known firm of biscuit manufacturers of the same name. In 1950, it passed into the hands of the violin virtuoso Jascha Heifetz (1901-1987). After Heifetz, the violin was kept in Mr. Henry Hottinger's collection. Since 1970, the violin had been carefully kept by Mr. Cho-Ming Sin, a Hong Konger residing in England. Nippon Music Foundation acquired the instrument in February 2000.

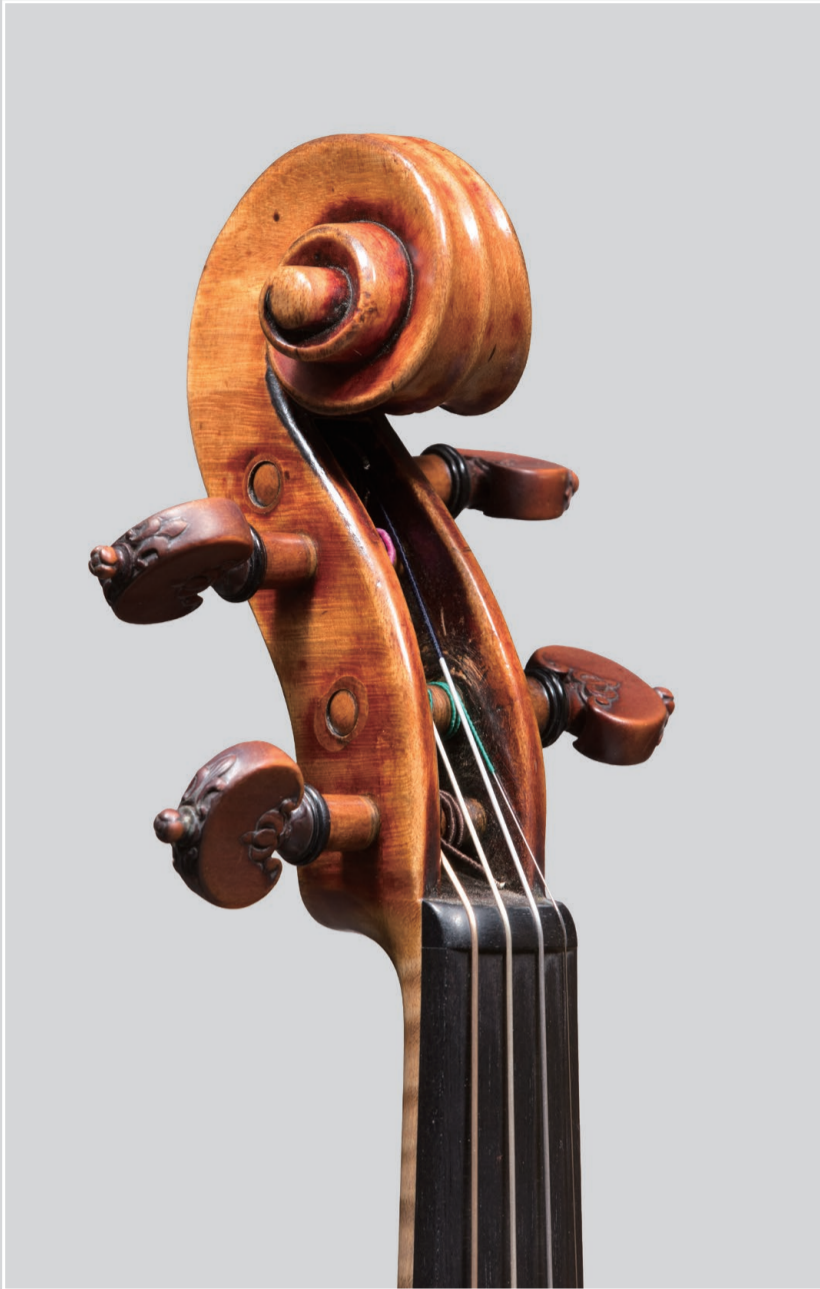
The back is in two pieces of exceptionally handsome maple, marked by a rather irregular curl ascending from the joint. That of the sides are with medium curl. The scroll is with fainter curl. The table is in two pieces of selected spruce marked by fairly even grain of medium width, opening slightly at the flanks. The varnish is rich orange-red in color. This violin has always been referred to as an outstanding example of the Golden Period of Stradivari's work in the W. E. Hill & Sons book, together with the 1715 “Alard” and the 1716 “Messie”.











ストラディヴァリウス

1715年製ヴァイオリン「ヨアヒム」

Stradivarius 1715 Violin “Joachim”

この楽器は、有名なハンガリーのヴァイオリン奏者ヨーゼフ・ヨアヒム (1831-1907) が所有していたことから「ヨアヒム」と名付けられた。ヨアヒムの所有した3挺の1715年製のストラディヴァリウス・ヴァイオリンのうちのひとつで、ヨアヒムはブダペストでこのヴァイオリンを購入した。ヨアヒムの死後、このヴァイオリンはヨアヒムの兄弟の孫娘で、ヨアヒムからヴァイオリンのレッスンを受けていたアディラ・ダラーニ (d'Aranyi) に遺贈されたことから「ヨアヒム＝アラニ」(Joachim-Aranyi) としても知られている。アディラとイエリー・ダラーニの姉妹は1910年から1930年にかけてヴァイオリン・デュオとして頻繁に演奏活動を行っていた。アディラはアレクサンダー・ファッチェリ氏と結婚し、それ以来、このヴァイオリンはファッチェリ家に所有されていた。日本音楽財団は2000年9月にファッチェリ家からこの楽器を購入した。

裏板はカエデの一枚板で、中小の幅の、水平な杓目が見られる。横板にも同様の杓目が見られる。スクロールには中程度の幅の杓目が見られる。表板はスプリースの二枚板で、均等な中程度の幅の木目である。ニスには、より明るい下地の上に茶とオレンジの中間色が広がっている。このヴァイオリンは、同じ1715年製で、ストラディヴァリが生まれたクレモナで保管されている、かの有名な「クレモネーゼ」と多くの類似点を持ち、裏板には「クレモネーゼ」と同じカエデの木材が使われている。

This instrument was named after the famed Hungarian violinist Joseph Joachim (1831-1907). It was one of the three 1715 Stradivarius violins Joachim owned. He purchased the violin in Budapest, and on his death, he bequeathed it to his great-niece, Adela d'Aranyi, who was taking violin lessons from him. Therefore, this violin is also known as “Joachim-Aranyi”. She and her sister Jelly d'Aranyi were frequently heard in public as a duo between 1910 and 1930. Adela married Mr. Alexander Facchiri and the violin had remained in the possession of the Facchiri family ever since. Nippon Music Foundation purchased it from the Facchiri family in September 2000.

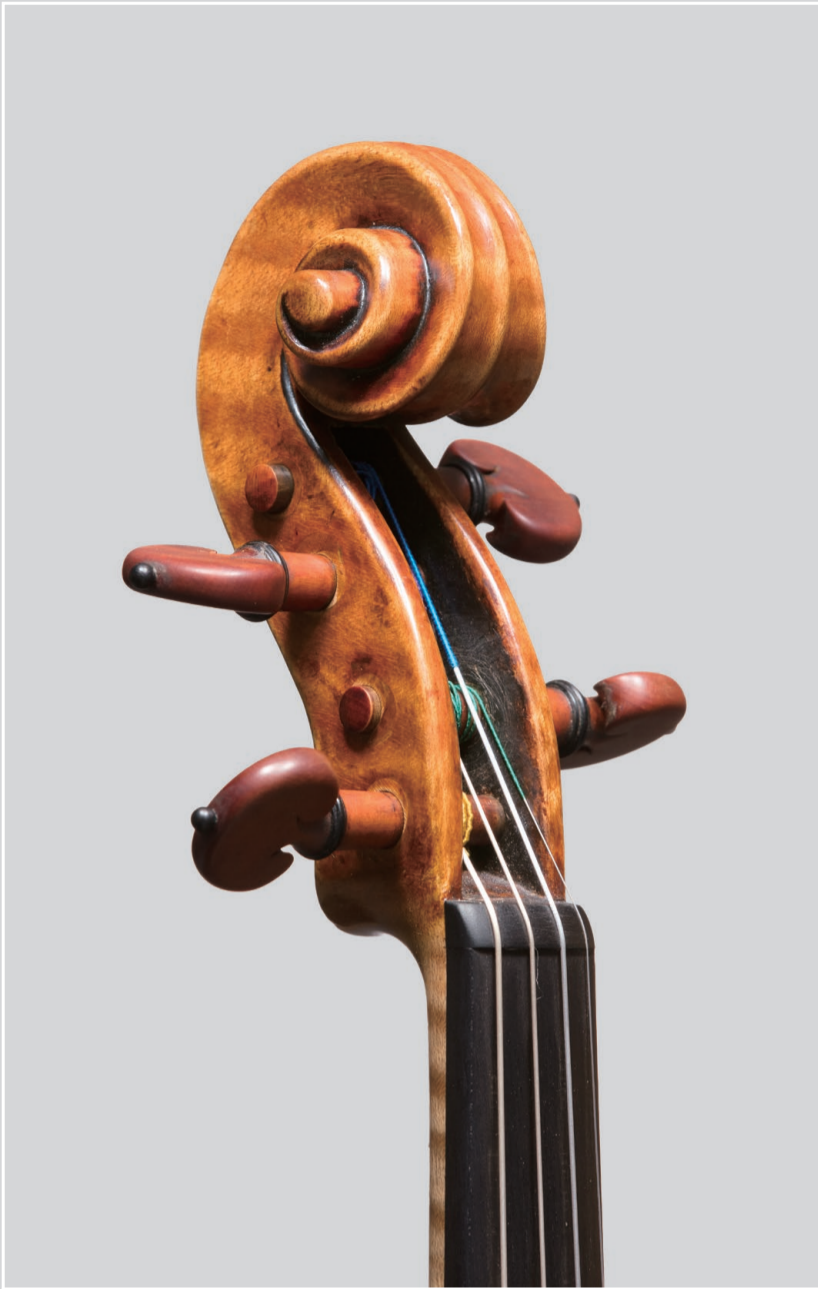
The back is in one piece of maple, marked by a handsome medium/small horizontal curl. That of the sides is similar. The scroll is marked by medium curl. The table is in two pieces of spruce marked by an even, medium grain. The varnish is of a brown-orange on a lighter ground. It has many similarities to the famous “Cremonese” violin made in the same year, preserved in Cremona, hometown of Stradivari. The back is made from the same piece of maple as the “Cremonese”.











ストラディヴァリウス

1716年製ヴァイオリン「ブース」

Stradivarius 1716 Violin “Booth”

このヴァイオリンは、英国のブース夫人が所有していたことから名付けられた。ブース夫人は、自身の子供たちのためにストラディヴァリの楽器でクアルテットを形成するため、1855年から1856年頃にパリの楽器商ジャン・バティスト・ヴィヨームからこの楽器を購入した。このヴァイオリンはオットー・ブース氏によって1885年にサウス・ケンジントンにて催された楽器展に出品され、その際に展示担当をしたW.E. ヒル&サンズを通して、1889年にロンドンの楽器商ジョージ・ハートに売却された。1890年頃、このヴァイオリンは米国に持ち込まれ、有名な収集家のヘンリー・オズボーン・ハヴァマイヤー氏の所有となった。1930年、W.E. ヒル&サンズからニューヨークのA.E. ラッセル氏に売却され、翌年の1931年には、ルドルフ・ウーリッツァー社から著名な米国のヴァイオリン奏者ミッシャ・ミシャコフ(1896-1981)に売却された。1961年、ニューヨークのヘンリー・ホットィンガー氏のコレクションの一部となり、1965年にルンベルト・ウーリッツァー社に売却された。J&A ベアーを通して、香港のチョー・ミン・シン氏の手に入り、1989年には英国のヴァイオリン奏者で指揮者のアイオナ・ブラウン(1941-2004)の元に渡り、世界各国の数多くの演奏会で使用された。日本音楽財団は1999年1月にこの楽器を購入した。

裏板はカエデの二枚板で、板の継ぎ目からやや下に向かって傾斜した美しい杓目が見られる。横板には力強く細い杓目が見られる。スクロールには裏板と同様の杓目が見られる。表板はスプリュースの二枚板で、木目は中程度の幅である。ニスはおレンジと赤の中間色である。

The name of this violin derives from Mrs. Booth of England, who purchased it around 1855-1856 from Parisian dealer Jean-Baptiste Vuillaume, to assemble a quartet of Stradivari instruments for the use of her children. This violin was exhibited by Mr. Otto Booth at the Loan Exhibition of Musical Instruments held at South Kensington in 1885 and was sold to the dealer George Hart of London in 1889 via W. E. Hill & Sons who acted as a curator of the violin at the exhibition. The violin was brought to the USA in around 1890 and became the property of Mr. Henry Osborne Havemeyer, a well-known collector. It was then sold to Mr. A. E. Russell in New York in 1930 via W. E. Hill & Sons and again in 1931 to the celebrated American violinist Mischa Mischakoff (1896-1981) through Rudolph Wurlitzer Co. In 1961, it became the property of the collector Mr. Henry Hottinger of New York who sold it to Rembert Wurlitzer, Inc. in 1965. Through J & A Beare Ltd., the violin was passed to Mr. Cho-Ming Sin of Hong Kong, and in 1989 to Iona Brown (1941-2004), a violinist and conductor in England, who used it in many of her performances worldwide, until Nippon Music Foundation purchased it in January 1999.

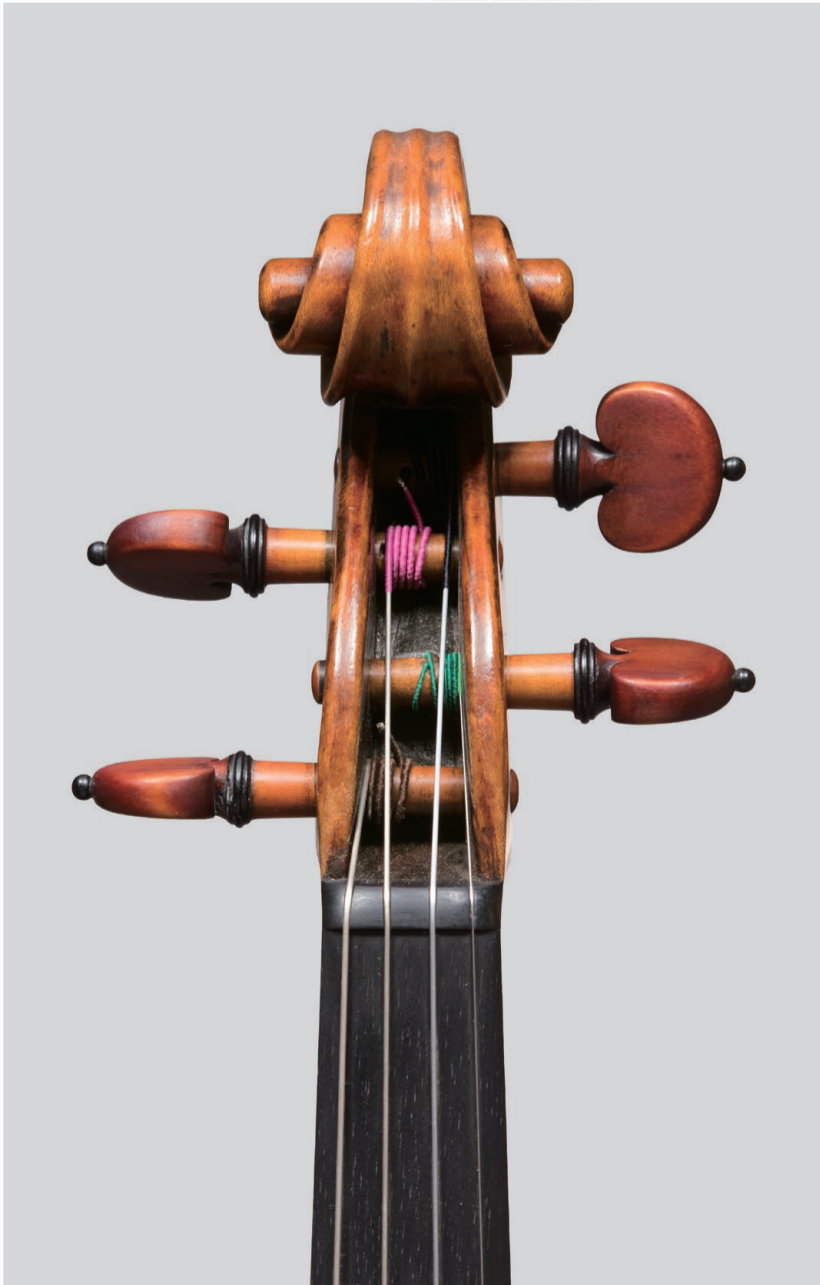
The back is made of two pieces of maple, marked by a handsome curl descending slightly from the joint. The sides are marked by a strong smaller curl, and that of the scroll is similar to the wood of the back. The table is in two pieces of spruce marked by medium-open grain. The varnish is orange-red in color.











ストラディヴァリウス

1717年製ヴァイオリン「サセルノ」

Stradivarius 1717 Violin “Sasserno”

このヴァイオリンは、初期にフランスのサセルノ伯爵が所有していたことからこの名前と呼ばれている。サセルノ伯爵は1845年にパリの楽器商ガン从这个楽器を購入し、1884年にスコットランドの楽器商デヴィッド・ローリーに売り渡した。1887年にアマチュア奏者のデイヴィッド・ジョンソン氏が購入し、1894年には W.E. ヒル&サンズが、英国のノーサンプトンで醸造所を所有していたピカリング・フィップス氏に売却した。この楽器は、1900年代初期に W.E. ヒル&サンズに売り戻された後、1906年に英国の実業家ヘンリー・サマーズ氏に売却され、以後93年間、同家によって保管されていた。日本音楽財団は1999年5月にこの楽器をサマーズ氏の孫娘から購入した。

裏板はカエデの二枚板で、板の継ぎ目から下に向かって傾斜したやや太めの幅の異なる美しい杓目が見られる。横板には裏板と同様の杓目が見られる。スクロールの杓目はより簡素である。表板はスプリュースの二枚板で、中心の木目は細く、両端にかけて急激に幅広になっている。ニスには下地が金色、その上に、オレンジと茶の中間色が広がっている。

The name of this violin derives from its ownership by early French owner Comte Sasserno who purchased it from Gand Père, dealer of Paris in 1845 and sold it in 1884 to David Laurie, a Scottish dealer. In 1887, it was bought by an amateur player Mr. David Johnson and then by W. E. Hill & Sons who in 1894 sold it to Mr. Pickering Phipps, owner of a brewery in Northampton, England. It was sold back to W. E. Hill & Sons in the early 1900s and in 1906 it was sold to an industrialist, Mr. Henry Summers of England, whose family retained it for 93 years. It is from his granddaughter that Nippon Music Foundation purchased the violin in May 1999.

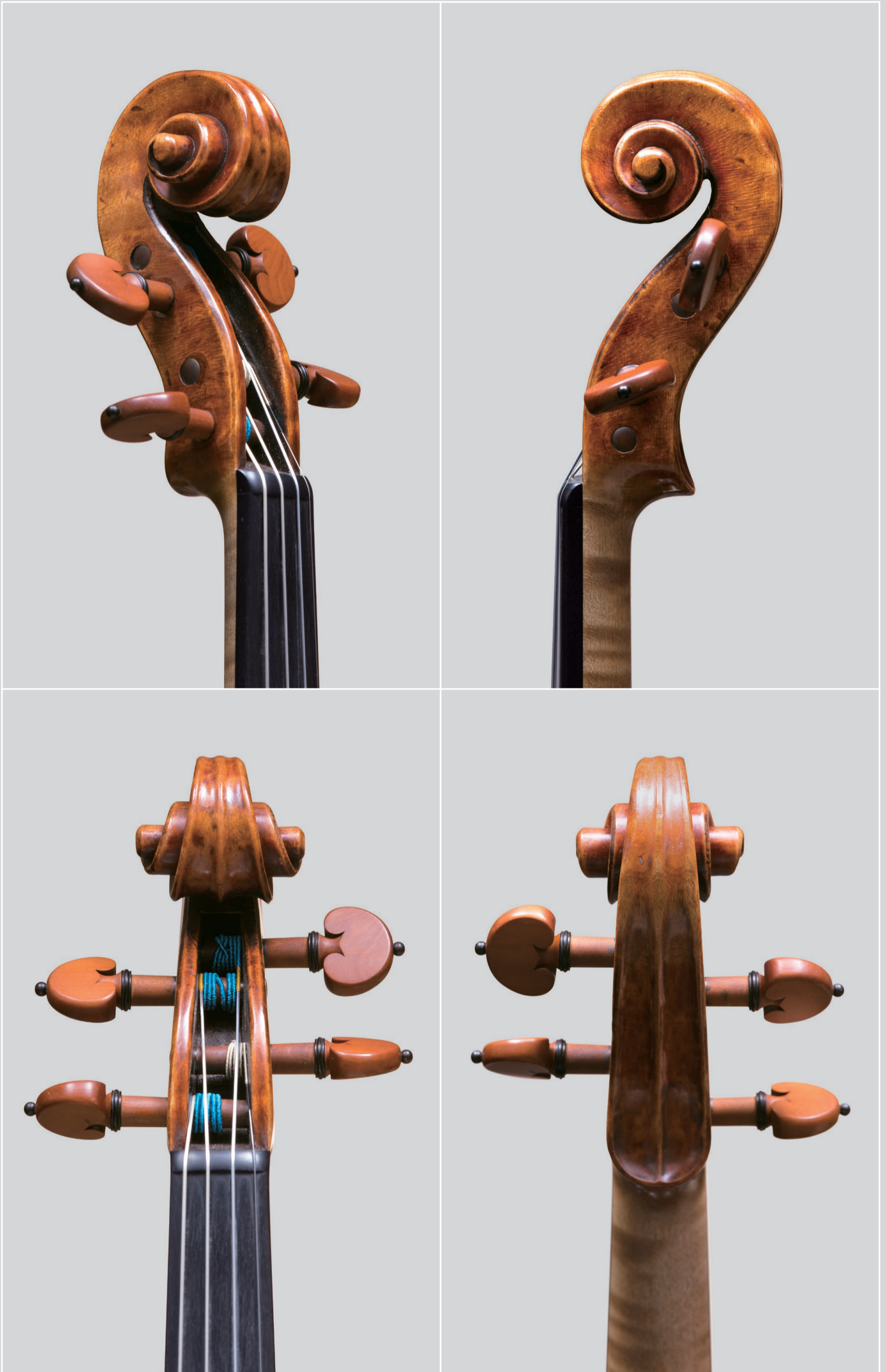
The back is made of two pieces of maple, marked by a handsome irregular broadish curl descending from the joint. The sides are of similar wood to the back, whereas that of the scroll is plainer. The table in two pieces of spruce is marked by fine grain at the center, opening quite quickly towards the flanks. The varnish is a warm orange-brown color on a golden ground.











ストラディヴァリウス

1722年製ヴァイオリン「ジュピター」

Stradivarius 1722 Violin “Jupiter”

このヴァイオリンは、英国の偉大な収集家ジェームズ・ゴディング氏によって「ジュピター」と名付けられたとされている。「インペラトル」または「旧ゴディング」としても知られている。1857年、パリの楽器商ジャン・バティスト・ヴィヨームを通して、フランスの収集家ジャンゼ子爵がゴディング氏からこのヴァイオリンを購入した。1886年、楽器商ジョージ・ウィザーズを通してカンポセリーチェ公爵の手に渡った。1887年にカンポセリーチェ公爵が死去し、その後、公爵夫人によってニューヨークのサロー・ウィード・バーンズ氏に売り渡された。パリのH.C.シルヴェストル氏の仲介によって1898年にW.E.ヒル&サンズがこのヴァイオリンを購入し、同年に、英国の収集家ロバート R.E. ブラント氏に売却した。1905年、ニューヨークのアマチュアチェロ奏者フィップス夫人がW.E.ヒル&サンズからこのヴァイオリンを購入し、夫のジョン S. フィップス氏に贈った。このヴァイオリンは長い間フィップス家の所有となった。1971年、カリフォルニア州サンマテオの臨床学教授エフレイム P. エングルマン博士 (1911-2015) がニューヨークのルンベルト・ウーリッツァー社を通してこのヴァイオリンを購入した。1992年、林原財団がこのヴァイオリンを購入し、日本音楽財団は1998年5月に同財団から購入した。

裏板はカエデの二枚板で、板の継ぎ目から下に向かってやや傾斜した小幅の美しい空目と、四隅に樹液の筋が見られる。横板にも同様の空目が見られる。スクロールの空目はより簡素である。表板はスプリュースの二枚板で、木目の幅は中程度、両端に向かってより幅広となっている。ニスには温かみのある赤とオレンジの中間色である。

It is said that the great English collector Mr. James Goding named the violin “Jupiter”. It is also known as “Imperator” and “Ex-Goding”. In 1857, this violin was purchased by the French collector Vicomte de Janzé from Mr. Goding through Parisian dealer Jean-Baptiste Vuillaume. In 1886, it passed into the hands of the Duke of Camposelice through the dealer George Withers. After the death of the Duke of Camposelice in 1887, the violin was sold to Mr. Thurlow Weed Barnes of New York by the Duchess of Camposelice. Working through the intermediary of H. C. Silvestre of Paris, W. E. Hill & Sons purchased the violin in 1898, and in the same year, sold it to the British collector Mr. Robert E. Brandt. In 1905, Mrs. Phipps, an amateur cellist from New York, purchased the violin from the Hills as a gift for her husband Mr. John S. Phipps. The violin remained in the Phipps family for many years. In 1971, an amateur violinist, collector and Clinical Professor of Medicine Dr. Ephraim P. Engleman (1911-2015) of San Mateo, California purchased the violin through Rembert Wurlitzer, Inc. of New York. In 1992, the Hayashibara Foundation purchased the violin, and from them the Nippon Music Foundation acquired it in May 1998.

The back is in two pieces of maple, marked by a small, handsome curl slightly descending from the joint, and there are sap marks in all four bouts. The sides are marked by similar curl, and the scroll is plainer. The table in two pieces of spruce is marked by medium grain, opening towards the flanks. The varnish is warm reddish-orange in color.











ストラディヴァリウス

1725年製ヴァイオリン「ウィルヘルミ」

Stradivarius 1725 Violin “Wilhelmj”

このヴァイオリンはドイツの著名なヴァイオリン奏者アウグスト・ウィルヘルミ (1845-1908) によって演奏されていたことからこの名前が付けられた。この楽器の来歴はパリの楽器商ジャン・バティスト・ヴィヨームまで遡る。1855年、ヴィヨームはボッホミュールというデュッセルドルフの奏者にこの楽器を売却し、この奏者から、法学博士でありアマチュアのヴァイオリン奏者でもあったウィルヘルミの父親が1866年に息子のために購入した。ウィルヘルミは所有していた多くの名器の中でもこのストラディヴァリウスを特に気に入って演奏していたが、公での演奏活動を休止して暫く経った1896年、「演奏者としてベストなうちに引退したい」と言って、50代の若さでこの楽器を手放した。1896年、シンシナティにいたウィルヘルミの弟子、ヒューゴ・クーパーシュミットが買い受け、彼は生涯にわたりこの楽器を所有し続けた。後に、ルドルフ・ウーリッツァー社がボルチモアのアマチュア奏者J.E. グライナー氏に売却し、1938年にモールズビー・キンバル氏に、1944年に米国の実業家であり発明家、そして美術品収集家でもあったトーマス・ファウィック氏に売却した。この楽器は、1969年にファウィック氏からヘンリク・カストン氏、同年にジェリー・カステローネ氏にわたり、1970年にゲオ・ゲイジ氏に売り渡され、1971年にW.E. ヒル&サンズに売却された。この楽器は同楽器商から極東の収集家に売却され、香港で大切に保管されていた。日本音楽財団は2001年6月にこの楽器を購入した。

裏板はカエデの二枚板で、板の継ぎ目から下に向かって傾斜した明瞭な小幅の空目が見られる。横板にも同様の空目が見られる。スクロールにはより幅広の空目が見られる。表板はスプリュースの二枚板で、木目は場所によって小幅からやや広めと、様々である。ニスには鮮やかな赤と茶の中間色である。

The name of this violin derives from its ownership by the acclaimed German violinist August Wilhelmj (1845-1908). The history of this violin dates back to Parisian dealer Jean-Baptiste Vuillaume. In 1855, he sold it to a player in Düsseldorf named Bochmühl, from whom the father of Wilhelmj, who was a doctor of law and an amateur violinist, purchased it in 1866 for his son. Among the many fine violins Wilhelmj owned, this Stradivari remained his favorite until 1896, sometime after he had ceased to play in public, when Wilhelmj decided to, as he said, “quit when at my best” and parted with the violin as young as in his early 50’s. In 1896, he sold the violin to his pupil Hugo Kupferschmidt of Cincinnati, who retained possession of it until his death. Subsequently, Rudolph Wurlitzer Co. sold it to J.E. Greiner, an amateur in Baltimore, in 1938 to Mr. Maulsby Kimball and in 1944 to Mr. Thomas L. Fawick, an industrialist, inventor and art collector in the United States. From Mr. Fawick, it was sold to Mr. Henryk Kaston and subsequently to Mr. Jerry Castellone, both in 1969 and then in 1970 to Mr. Geo Gage, who offered it to W. E. Hill & Sons in 1971. The firm sold it to a collector in the Far East, and it had been safely kept in Hong Kong until Nippon Music Foundation purchased the violin in June 2001.

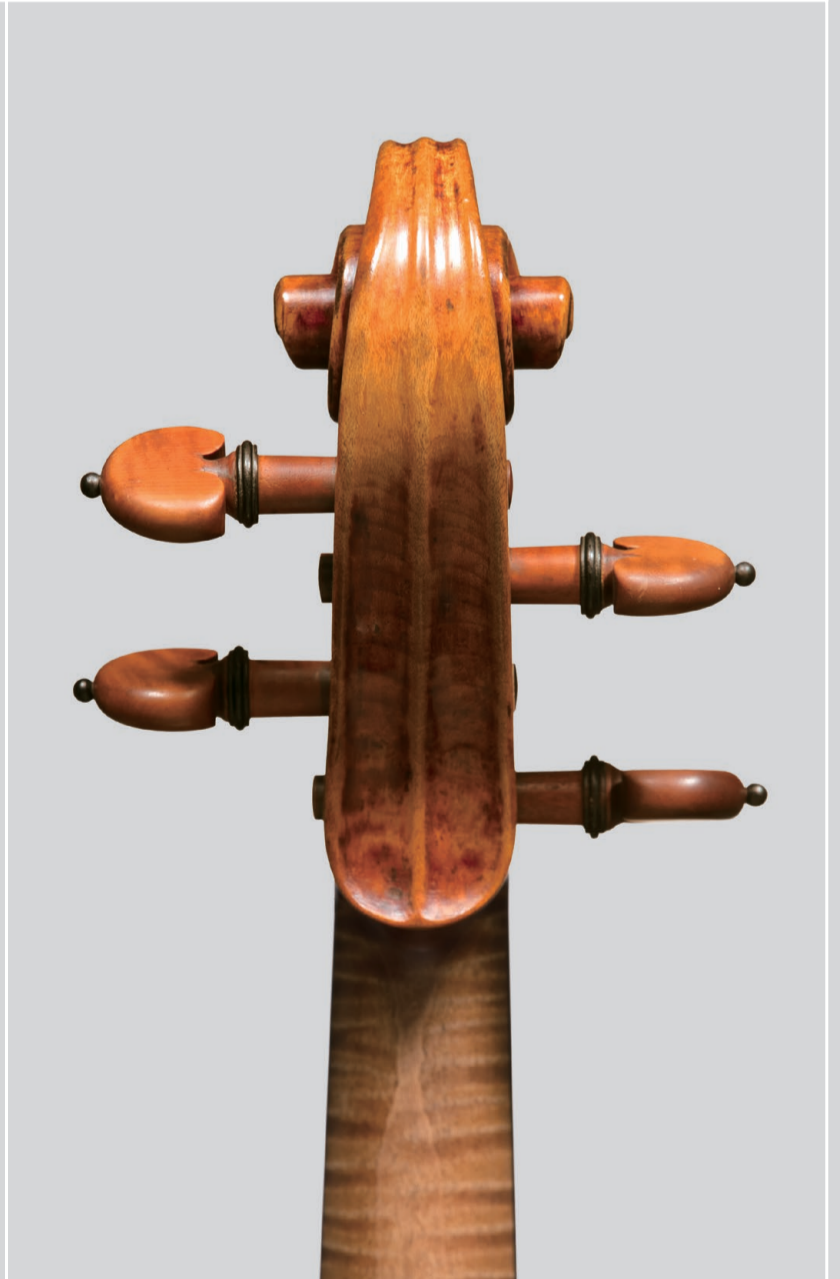
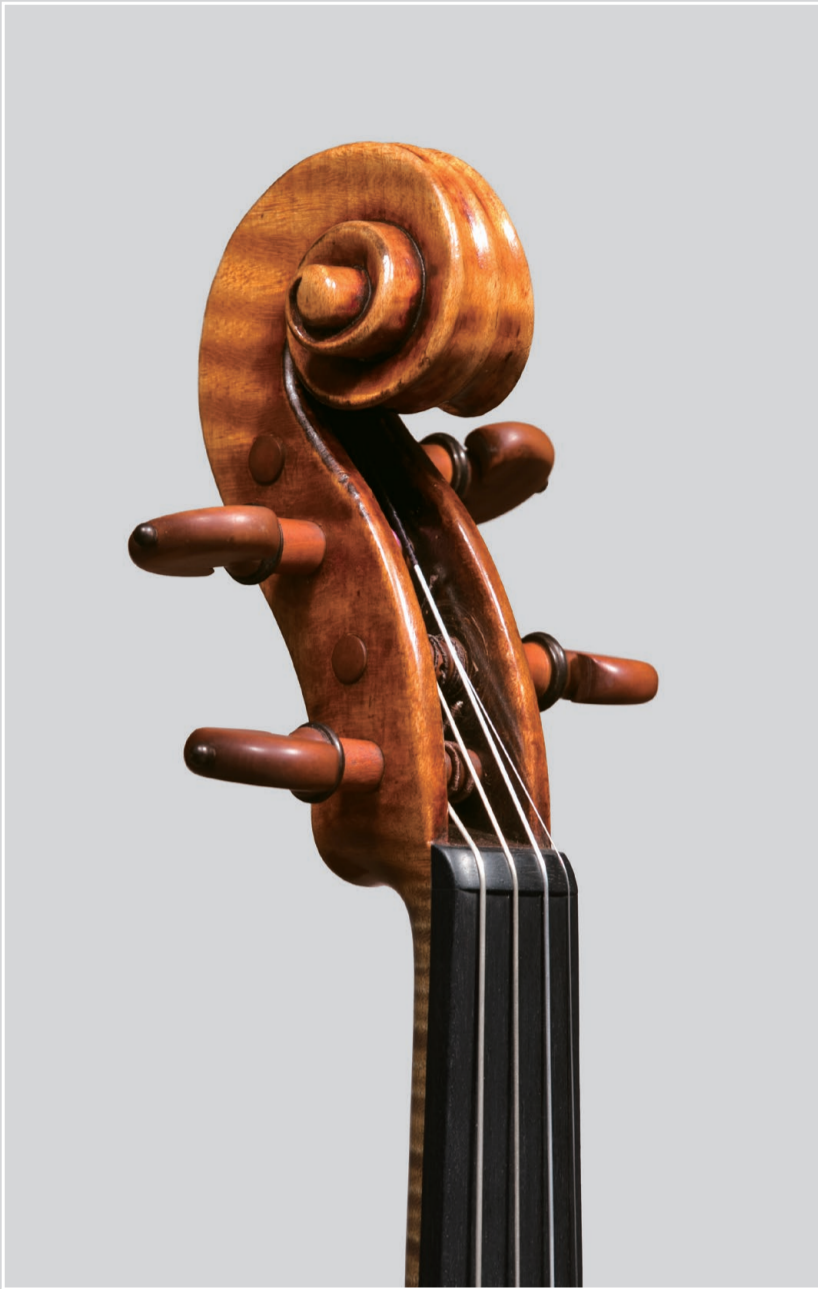
The back is in two pieces of maple, marked by a small, pronounced curl, slanting downwards slightly from the joint. That of the sides is similar, whereas the scroll has a broader curl. The table is in two pieces of spruce marked by varied grain, fine in some areas and open in others. The varnish is a rich red-brown color.











ストラディヴァリウス

1735年製ヴァイオリン「サマズィユ」

Stradivarius 1735 Violin “Samazeuilh”

この楽器は1836年にイタリアの楽器商でコレクターのルイジ・タリシオによってフランスに持ち込まれ、リヨンの楽器商ピエール&イッポリット・シルヴェストルに売却された。彼らはアマチュア奏者で名器の収集家でもあったシャポネ伯爵に売却した。1870年代にこの楽器はH.B. マートンによって英国に持ち込まれ、ウィリアム・ピッカリング氏の手に入り、後にクレメンツ氏の元に渡った。W.E. ヒル&サンズは同氏からこの楽器を購入し、1901年コペンハーゲンのヴァイオリニスト、アーサー・ハートマン(1881-1956)に売却し、1903年にボルドーのジョセフ・サマズィユ夫人に売却した。このことから、このヴァイオリンは「サマズィユ」と呼ばれることとなった。1923年、ヴァイオリンのヴィルトゥオーゾ、ミッシェル・エルマン(1891-1967)の手に入り、彼は1926年に手紙の中で、「ストラディヴァリウスの中で最高級の音色を持つ楽器」と綴っている。後に、米国の弁護士レイモンド・ピトケアン氏がこのヴァイオリンを所有することになったが、1981年にニューヨークで開催されたオークションでこの楽器を落札したオランダの楽器商マックス・メラがヨーロッパに持ち帰った。1983年以降、このヴァイオリンはスイス在住の個人に所有されていた。日本音楽財団は2017年8月に岡本夫妻の寛大な寄付と日本財団の助成によってこのヴァイオリンを購入した。

裏板はカエデの二枚板で、薄らと幅の広い杓目が見られる。横板には中程度の幅の杓目が見られる。スクロールにはほとんど杓目は見られない。表板はスプリュースの二枚板で、両端に行くほど木目の幅は広い。ニスには、下地が金色、その上に深みのある赤色が広がっている。

This violin was taken to France by an Italian dealer and collector Luigi Tarisio in 1836, who sold it to Pierre and Hippolyte Silvestre, dealers of Lyon. They in turn sold it to Comte de Chaponay, an amateur and possessor of a fine collection of instruments. In the 1870s it was brought to England by H. B. Merton, then passed to Mr. William Pickerling followed by Mr. Clements. He in turn sold it to W. E. Hill & Sons, who subsequently sold it to the violinist Arthur Hartmann (1881-1956) of Copenhagen in 1901 and again to Madame Joseph Samazeuilh de Bordeaux in 1903, hence the name of the violin “Samazeuilh”. In 1923, it came in the possession of the virtuoso Mischa Elman (1891-1967), who in a letter written in 1926 considered it “one of the best Stradivarius instruments for tone quality...”. Later it was owned by Mr. Raymond Pitcairn, a lawyer in the USA, but the violin returned to Europe in 1981 when Max Möller, a dealer in the Netherlands, purchased it at an auction in New York. From 1983, the violin was in the same private possession in Switzerland. In August 2017, Nippon Music Foundation acquired this violin with a substantial contribution from Mr. and Mrs. Okamoto of Japan and support from The Nippon Foundation.

The back is in two pieces of maple with faint broad curl. The sides are of medium curl and the scroll is of plainer maple. The table is in two pieces of spruce with grains of fine width that broaden gradually towards the flanks. The varnish is of a deep red color on a golden ground.











ストラディヴァリウス

1736 年製ヴァイオリン「ムンツ」

Stradivarius 1736 Violin “Muntz”

英国バーミンガムの有名な収集家でアマチュアのヴァイオリン奏者でもあった H.M. ムンツ氏が所有していたことから、この名が付けられた。ストラディヴァリの末の息子パオロによって保管されていたヴァイオリンのひとつで、1755年にコジオ・ディ・サラブエ伯爵に売り渡された。1827年にルイジ・タリシオがこの楽器を入手し、1831年にパリの楽器商ガンに売却した。翌年、フランスのアマチュア奏者ダミアン伯爵が入手し、約30年間所有していた。1862年にガン&ベルナルデルを通してアントワープの有名な収集家チャールズ・ウィモレット氏に売却された。1872年に英国バーミンガムの H.M. ムンツ氏はこのヴァイオリンをガン&ベルナルデルから購入した。1886年に W.E. ヒル&サンズはこの楽器を購入した後、ウィルトン伯爵に、続いて1889年にアルフレッド・サスン氏に売却した。サスン氏の死後、このヴァイオリンはヒギンス氏の手に渡った。R.A. バウアー氏は亡くなったヒギンス氏の相続人からこのヴァイオリンを購入し、その後、アーヘンのゲオルク・タルボット博士がバウアー氏からこの楽器を購入し、1937年にクレモナの楽器展に出品した。その後、米国のアマチュア・ヴァイオリン奏者で収集家のエフレイム P. エングルマン (1911-2015) 博士の手に渡り、次に著名なヴィルトゥオーゾでシカゴ交響楽団の首席奏者でもあったスティーヴン・スターリク、ヴァイオリン奏者で楽器収集家のハワード・ゴットリーブの元に渡った。日本音楽財団は1997年7月にこのヴァイオリンを購入した。

裏板はカエデの二枚板で、中程度の幅の異なる水平な空目が見られる。横板とスクロールにも同様の空目が見られる。表板はスプルースの二枚板で、木目の幅は中程度、両端に向かってより幅広となっており、特に低音側は顕著である。透明なオレンジと金の間色のニスで楽器のほぼ全体を覆っている。晩年の作品によく見られる特徴として、f字孔の位置が左右非対称である。内部に貼られたラベルにはストラディヴァリ本人の手書きで「d'anni 92 (92歳)」と書かれている。

This violin takes its name from a famous collector and amateur violin player Mr. H. M. Muntz of Birmingham, England. This was one of the violins kept by Stradivari's youngest son Paolo and was sold to Count Cozio di Salabue in 1775. Luigi Tarisio acquired the violin in 1827 and sold it to the elder Gand, dealer of Paris, in 1831. In the following year a French amateur Comte d'Amiens acquired and kept the violin for thirty years. In 1862, it was sold through Gand et Bernardel to the well-known collector Mr. Charles Wilmotte of Antwerp. Mr. H. M. Muntz of Birmingham, England, bought the violin from Gand et Bernardel in 1872. It passed to W. E. Hill & Sons in 1886, and then to the Earl of Wilton, before the Hill firm again sold it to Mr. Alfred Sassoon in 1889. The violin passed to Mr. Higgins after the death of Mr. Sassoon. R. A. Bauer acquired the violin from the heirs of the late Higgins, from whom Dr. Georg Talbot of Aachen purchased it and exhibited it at Cremona in 1937. It passed to Dr. Ephraim P. Engleman (1911-2015) who was an American amateur violinist and collector, then to Steven Staryk, a well-known virtuoso and concertmaster of the Chicago Symphony Orchestra, and then the violinist and collector Howard Gottlieb. Nippon Music Foundation acquired this violin in July 1997.

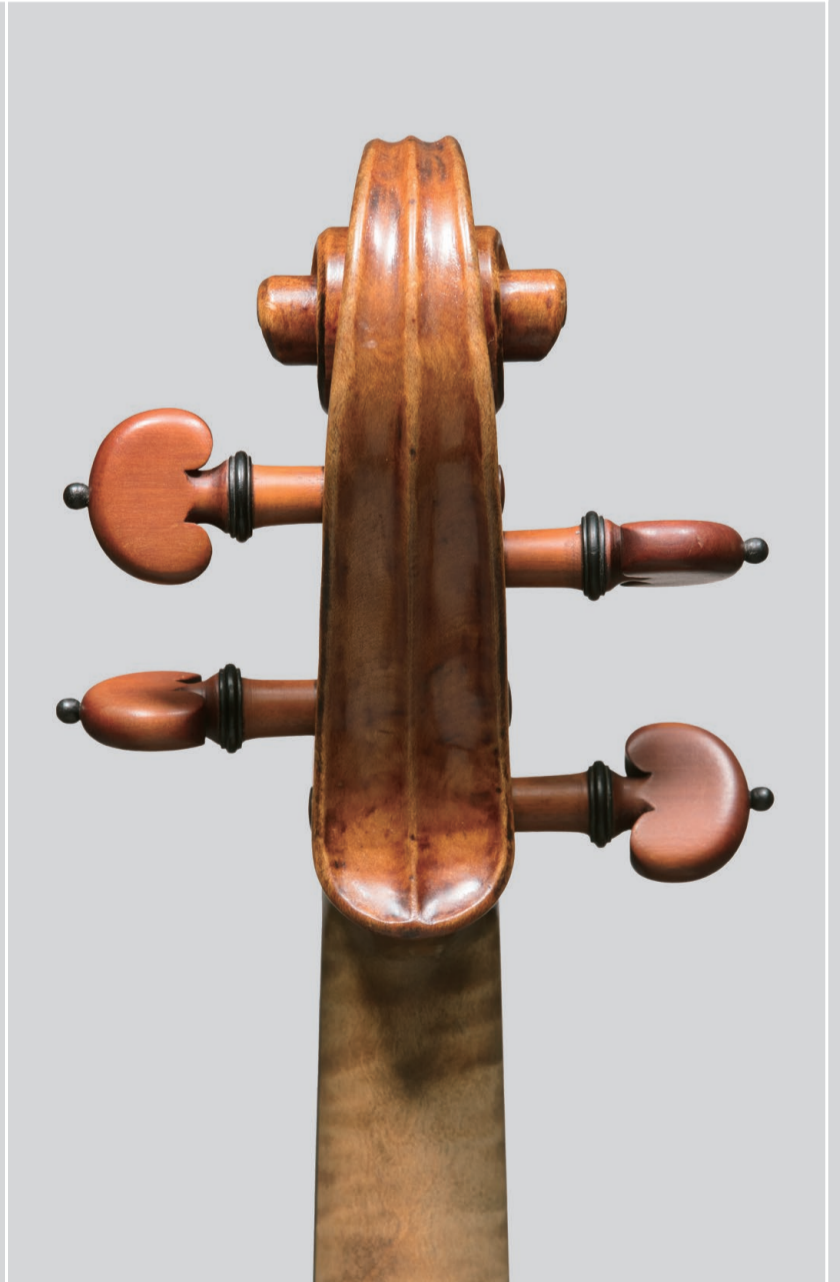
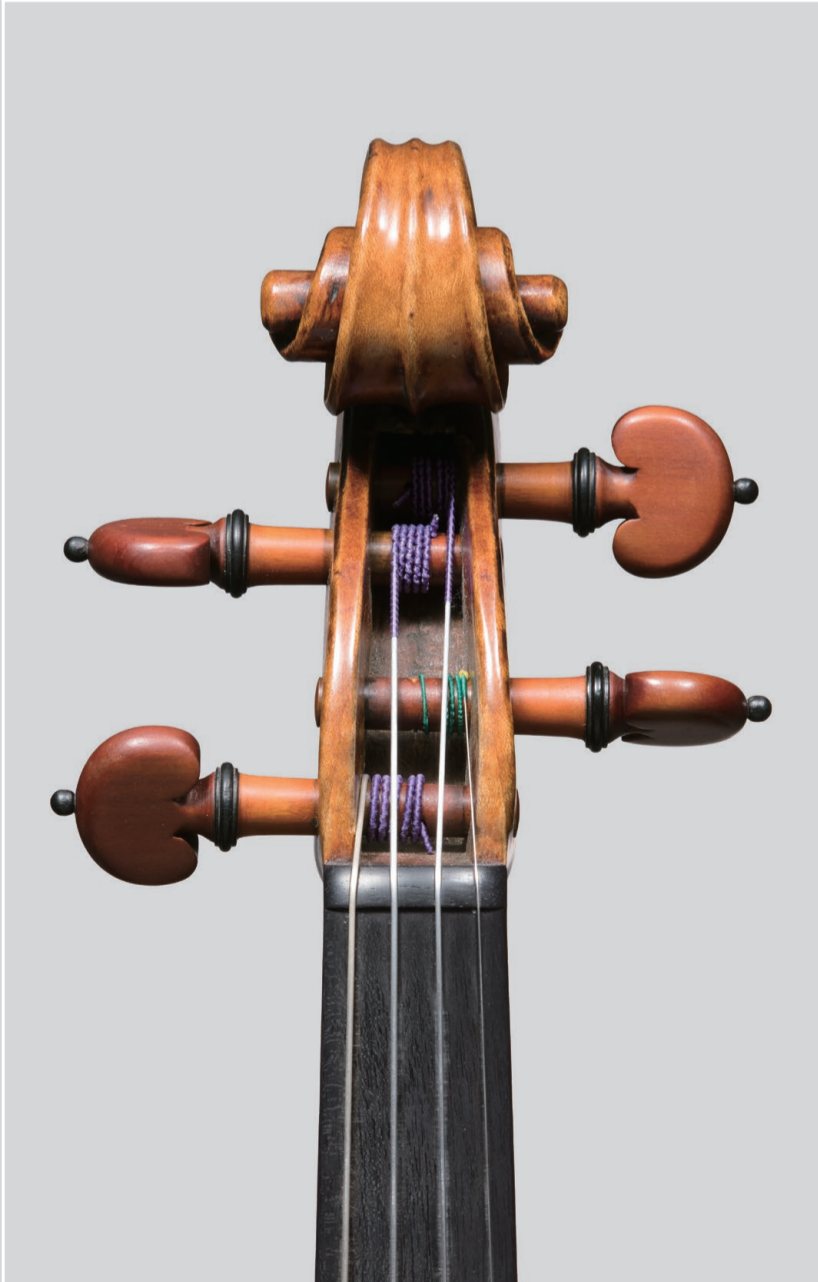
The back is in two pieces of maple, marked by an irregular medium horizontal curl, and that of the sides and scroll is similar. The table in two pieces of spruce is marked by medium grain, opening towards the flanks, particularly on the bass side. The varnish of a transparent orange-gold color still covers most of the instrument. The sound-holes are not square across the table, which is fairly typical of many of the later examples. The label attached to this instrument bears an Italian inscription, “d'anni 92 (92 years old)”, handwritten by Stradivari himself.











ストラディヴァリウス

1696年製チェロ「ロード・アイレスフォード」

Stradivarius 1696 Cello “Lord Aylesford”

現存するアントニオ・ストラディヴァリ作のチェロは約50挺と言われている。1780年頃、このチェロは、有名なヴァイオリニストであったフェリーチェ・デ・ジャルディーニ(1716-1796)によってイタリアからロンドンに持ち込まれ、同氏からアマチュア奏者として知られていたアイレスフォード卿に売り渡された。その後、アイレスフォード家に約100年間所有されていたことからこの名前が付けられた。1875年にロンドンの楽器商ジョージ・ハートに売却され、1880年に同氏からヒース男爵に売却された。しかし、1882年にジョージ・ハートによって買い戻され、リチャード・ベネット氏に売却された。同氏は、後年、クレモナの名器から成るコレクションを形成し、「メシア」、「アラード」を含む有名なストラディヴァリウスも所有していた。ベネット氏はチェロの演奏はしなかったことからこの楽器を手放し、1892年にW.E. ヒル&サンズに販売を託した。1898年まで同楽器商に所有された後、再びジョージ・ハートに売り渡され、次にブエノスアイレスのキーン氏に売却された。1923年にはパリのモコテル氏に買い取られ、後に、シュトゥットガルトのハンマ氏の仲介によってドイツで売却された。この楽器は後にフィンランドのヴィボルグに住むハリー・ウォール氏のコレクションに加わった。第二次世界大戦後、同氏の所有する多くの楽器はニューヨークの楽器商エミール・ハーマンに売却され、この楽器は、1946年に当時フィラデルフィアに住んでいた世界的著名なチェロ奏者グレゴール・ピアティゴルスキー(1903-1976)の所有となった。1950年から1965年にかけて、ヤーノシュ・シュタルケル(1924-2013)が使用することになり、この楽器で録音を35回行った。1966年、ベルンの弦楽器職人アンリ・ヴェロの手に渡り、その後同家によって保管されていた。日本音楽財団は2003年6月にヴェロ家からこの楽器を購入した。

裏板はカエデの二枚板で、小幅で中程度の濃さの杓目が見られ、低音側の下方の端にはストラディヴァリ自身によって小さな接ぎ木が足されている。横板とスクロールにも同様の杓目が見られる。表板はスプリースの五枚板で、中程度またはやや広い幅の木目である。オレンジと茶の間色のニスが全体に塗られており、表板はより深みのある風合いである。弾き易さを考慮して、本体の丈がオリジナルから若干短く調節されている。これは腕利きの弦楽器職人であったジャン・ヴェロによって見事に施され、見た目にはほとんど判らない仕上がりである。

It is said that there are about 50 cellos made by Antonio Stradivari which remain today. This cello was brought to London from Italy around 1780 by a well-known violinist Felice de Giardini (1716-1796), who sold it to Lord Aylesford, a well-known amateur player. It was retained by his family for about 100 years, hence the name of this cello. In 1875, it was sold to the violin dealer George Hart of London, who sold it to Baron Heath in 1880. However, it was bought back by George Hart in 1882, and re-sold to Mr. Richard Bennett, who in his later years formed a fine collection of Cremonese masterpieces. At one time he also possessed the “Messie”, the “Alard” and other famous Stradivari instruments. Not being a cellist himself, Mr. Bennett parted with the instrument and left it on sale with W. E. Hill & Sons in 1892. The firm retained possession of it until 1898, when it once again passed into the hands of George Hart, who later sold it to Mr. Keene of Buenos Aires. It was purchased by Maucotel of Paris in 1923 and was sold in Germany through the intermediary of Mr. Hamma of Stuttgart. It later formed part of the famous collection of Mr. Harry Wahl in Vyborg, Finland. After World War II, he sold many of his instruments to Emil Herrmann, dealer of New York, and through him in 1946, it passed into the possession of Gregor Piatigorsky (1903-1976), the world-acclaimed cellist who resided in Philadelphia. Janos Starker (1924-2013) had the use of this cello between 1950-1965 and made 35 recordings with the instrument. In 1966, the cello passed into the hands of Henry Werro, luthier of Berne and had been kept by his family since then. Nippon Music Foundation acquired this instrument in June 2003 from the Werro family.

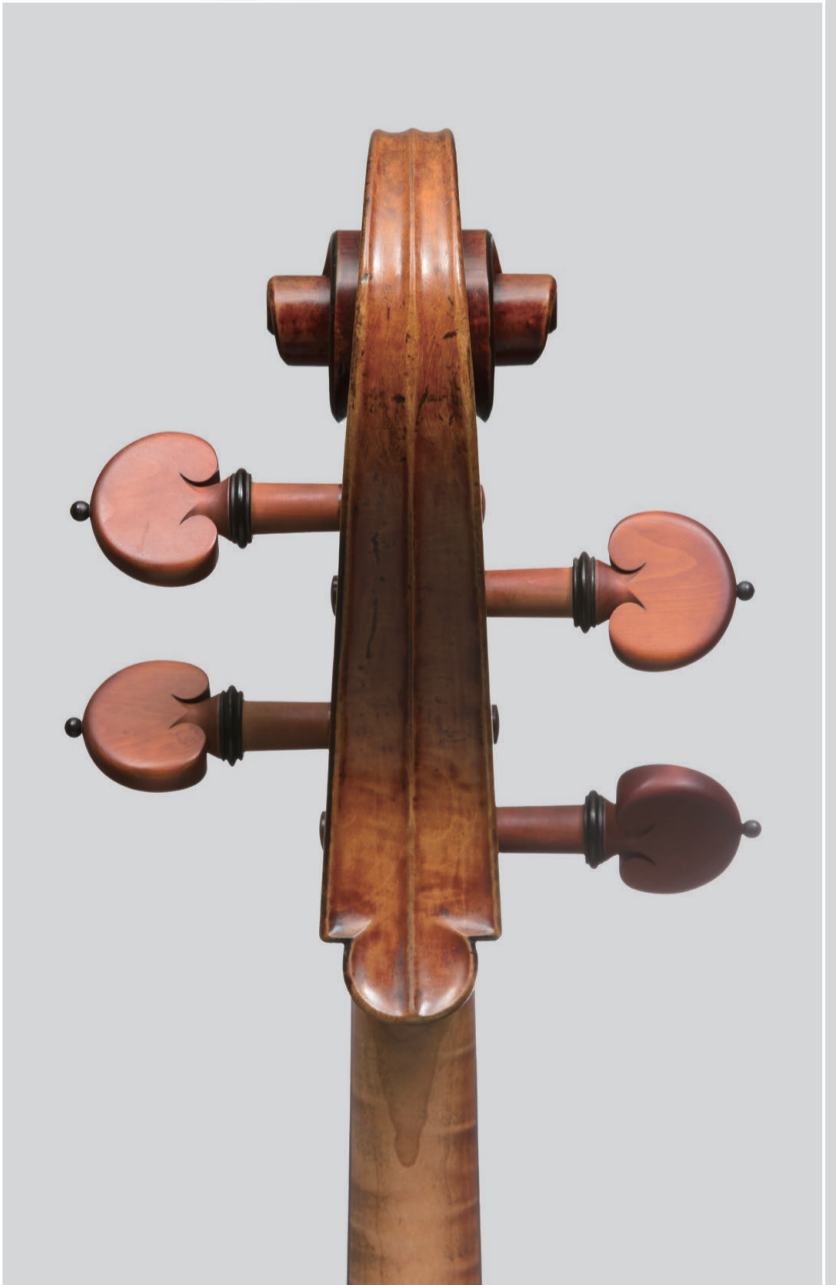
The back, in two pieces, is of maple marked by a narrow curl of medium strength, a small wing having been added by the maker to the lower bass flank. That of the sides and the scroll is similar. The table, in five pieces of spruce, is of mostly medium to medium broad grain. The varnish, liberally applied, is of an orange brown color, of a deeper shade on the table. The length of the body was slightly reduced from its original dimensions in order to make it easier to play. This work was carried out very successfully by an excellent luthier Jean Werro in a way that cannot be visually recognized.











ストラディヴァリウス

1730年製チェロ「フォイアマン」

Stradivarius 1730 Cello “Feuermann”

1860年代、パリの楽器商ジャン・バティスト・ヴィヨームの顧客とされるパリの有名なアマチュア奏者デュ・バロー氏によってこの楽器は所有されていた。次いで著名なチェリスト、オーグスト・ジョセフ・フランショーム (1808-1884) が息子のために入手した。しかし、息子の早世によって、1868年、このチェロはパリのガン&ベルナルデルを通して、アドリアン・フランソワ・セルヴェ (1807-1866) の弟子であるブリュッセルの名チェロ奏者アーネスト・デ・ムンク (1840-1915) に売却された。このことから、この楽器は「デ・ムンク」とも呼ばれている。1915年にロンドンで死去する少し前、ムンクは弟子の C.H. ヘリオットに売り渡し、後にヘリオットは W.E. ヒル&サンズに売却した。1939年、同楽器商はこのチェロを著名なチェロ奏者エマヌエル・フォイアマン (1902-1942) に売却し、フォイアマンは数多くの演奏会や録音に使用した。このことから、後に「フォイアマン」として知られることになった。彼の死後、この楽器は1943年に米国の収集家ラッセル B. キングマン氏の手に移り、後に再び W.E. ヒル&サンズの元に渡った。1956年に楽器商ルンベルト・ウーリッツァーから名チェロ奏者アルド・パリソ (1918-2018) に売却された。日本音楽財団は1996年12月にこの楽器を購入した。

裏板はカエデの二枚板で、小幅の水平な空目が薄らと見られる。横板の空目もこれと似ているが、より明瞭に模様が出ている。スクロールの空目はより簡素である。表板はスプールの三枚板で、木目はほぼ均等である。低音側の上方の端には小さな節がある。厚く塗られたニスには明るい栗色と赤の中間色である。ストラディヴァリはこの楽器を含め、いくつか身幅の狭いチェロの製作を試みている。これについて W.E. ヒル&サンズのアルフレッド・ヒルは、女性奏者のためにデザインしたのではないかとしている。

In the 1860's, this instrument was in the possession of a well-known Parisian amateur Monsieur de Barrau, who was believed to be a client of Parisian dealer Jean-Baptiste Vuillame. It subsequently passed into the hands of the well-known cellist August-Joseph Franchomme (1808-1884) for the use of his son. However, due to the son's premature death, the cello was sold through the intermediary of Gand et Bernardel of Paris in 1869 to Ernest De Munck (1840-1915) of Brussels, a cellist of repute and a pupil of Adrien-Francois Servais (1807-1866). Hence, this cello is also known as "De Munck". Shortly before his death in London in 1915, he sold the cello to one of his pupils C. H. Heriot who then sold it to W. E. Hill & Sons. In 1939, the Hills sold the cello to renowned cellist Emanuel Feuermann (1902-1942), who used it for many concerts and recordings. It has since come to be known as "Feuermann". After his death, it was acquired by the American collector Mr. Russell B. Kingman in 1943 and later again by W. E. Hill & Sons. It was later sold in 1956 from the dealer Rembert Wurlitzer to the distinguished cellist Aldo Parisot (1918-2018). Nippon Music Foundation acquired this cello in December 1996.

The back, in two pieces of maple, is marked by a faint small horizontal curl. That of the sides is similar but more pronounced, and the scroll is plainer. The table, in three pieces of spruce, is of fairly even grain. The upper bass flank is marked by a small knot. The varnish, of thick texture, is of a light chestnut-red color. Stradivari experimented with some narrower shaped cellos including the "Feuermann", and Alfred Hill of W. E. Hill & Sons speculated that these cellos may have been designed for female players.











グアルネリ・デル・ジェス

1736年製ヴァイオリン「ムンツ」

Guarneri del Gesù 1736 Violin “Muntz”

このヴァイオリンはアントニオ・ストラディヴァリと並び称される名工バルトロメオ・ジュゼッペ・グアルネリ（グアルネリ・デル・ジェス）（1698-1744）が製作した。英国バーミンガムのアマチュア奏者で収集家のムンツ氏がかつて所有していたことから、この名前と呼ばれている。彼はパリのガン&ベルナルデルからこの楽器を購入した。彼の死後、娘がこのヴァイオリンを受け継ぎ、彼女もこのヴァイオリンを演奏していたが、1911年にロンドンのW.E. ヒル&サンズに売却した。この楽器は同楽器商から、1913年にボヌマン氏へ、1931年にアマチュア奏者のアルフレッド C. マーシャル氏へ売却された。彼の死後、1934年にW.E. ヒル&サンズからラヴェンズデイル男爵夫人がこの楽器を入手し、米国のヴァイオリン奏者ギラ・ブスタボ（1916-2002）が演奏していた。1970年、彼女がW.E. ヒル&サンズに売却の相談をしたところ、同楽器商は、アムステルダムの楽器商マックス・メラーがちょうどこのような楽器を至急必要としていたことから彼を紹介し、同年、この楽器はノース・カロライナ州のジョルジオ・チオンピ氏の手に入った。このことから、この楽器は「旧ムンツ」、「旧A.C. マーシャル-ムンツ」、「旧チオンピ」とも呼ばれていた。日本音楽財団は1995年3月にチオンピ氏からこのヴァイオリンを購入した。

裏板はカエデの一枚板で、右下に向かって傾斜した幅広の空目が薄らと見られる。横板にはより力強い小幅の空目が見られ、これに比べて、スクロールの空目はより簡素である。表板はスプルースで、木目は場所によって小幅または中程度の幅と様々である。下地のニスは金色で、その上にオレンジと茶の中間色が広がっている。

This violin was made by Bartolomeo Giuseppe Guarneri “Guarneri del Gesù” (1698-1744), a celebrated luthier comparable to Antonio Stradivari. This violin takes its name from Mr. H. M. Muntz of Birmingham, England, its previous owner who was an excellent amateur and collector of Birmingham. Mr. Muntz purchased this violin from Gand et Bernardel of Paris. On his death, the violin was passed into the hands of his daughter, who also played the violin, and sold it to W. E. Hill & Sons of London in 1911. It was then sold to Mr. Bonnemain in 1913 and subsequently to an amateur Mr. Alfred C. Marshall in 1931 both by W. E. Hill & Sons. On his death, it was acquired in 1934 by the Baroness Ravensdale from W. E. Hill & Sons for the use of Guila Bustabo (1916-2002), an American violinist. She kept possession of the violin until 1970 when she approached W. E. Hill & Sons about selling the violin, and the Hills recommended Max Möller, dealer of Amsterdam, as he was urgently looking for just such an instrument. In the same year, it was passed into the hands of Mr. Georgio Ciompi of North Carolina. Hence, the violin was also known as “Ex-Ciompi”, “Ex-Muntz” as well as “Ex-A. C. Marshall-Muntz”. Nippon Music Foundation acquired this violin from Mr. Ciompi in March 1995.

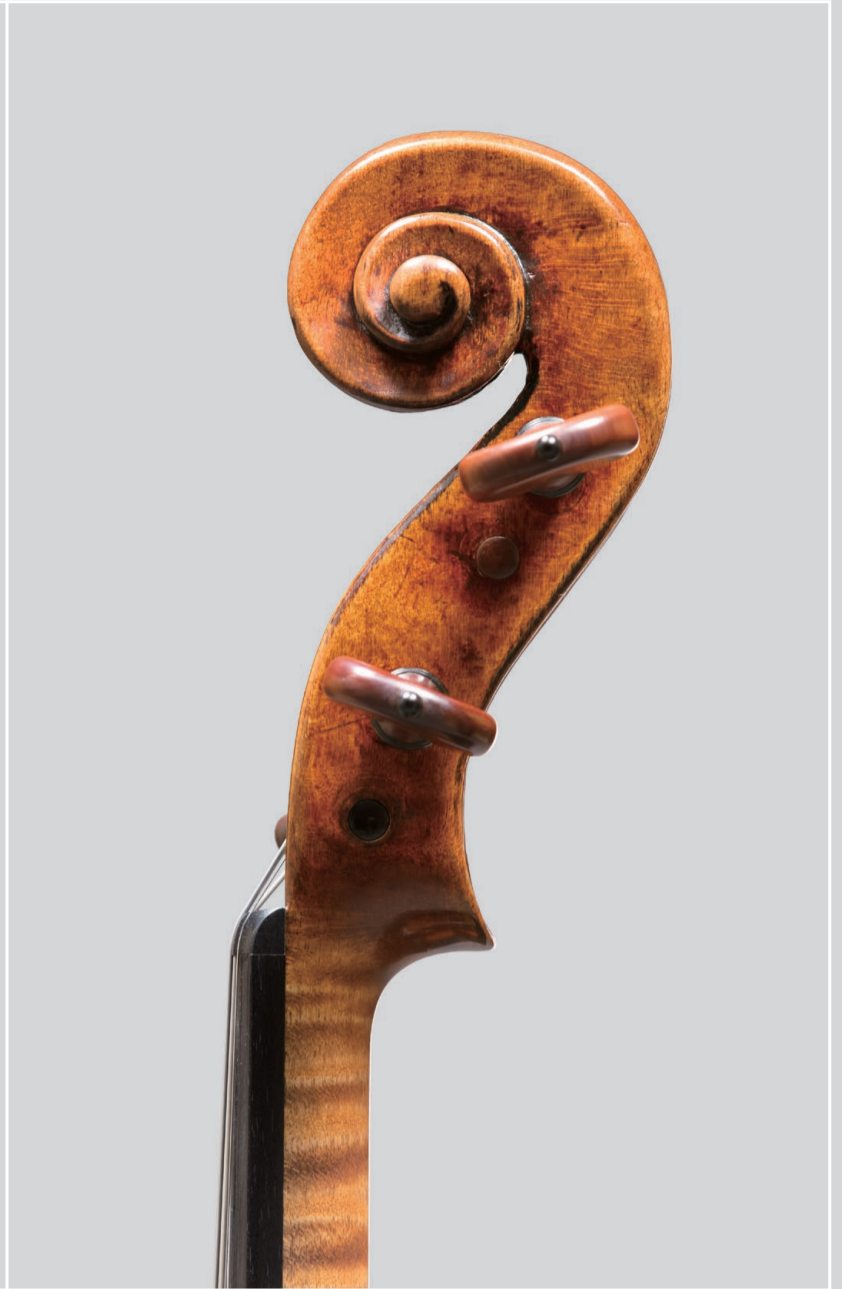
The back is in one piece of maple marked by a broad faint curl descending to the right. That of the sides is marked by a stronger smaller curl, whereas the scroll is plainer. The table is of spruce marked by varying grain, part small, part medium, and the varnish is an orange-brown color on a golden ground.











ガルネリ・デル・ジェス

1740年製ヴァイオリン「イザイ」

Guarneri del Gesù 1740 Violin “Ysaÿe”

このヴァイオリンはウジェーヌ・イザイ (1858-1931) が所有し、長年演奏活動に使用していたことからこの名前が付けられた。楽器の中に貼られた小さなラベルには、赤いインクで「このデル・ジェスは私の生涯を通じて忠実なパートナーだった。イザイ 1928」とフランス語で書かれている。この楽器はイザイの国葬の際にはクッションに載せられ、棺の前を行進したことで知られている。イザイが所有する以前は、バルデスキ伯爵、英国の収集家ジョン・アダム氏、アントワープの収集家でアマチュア奏者のチャールズ・ウィルモット氏が所有していた。ウィルモット氏は楽器商ガン&ベルナルデルの依頼によって、1889年パリでこのヴァイオリンをキャリー・メス嬢の父親に売り渡した。イザイの弟子であった彼女はイザイの弟テオと結婚し、1896年、このヴァイオリンは義理の兄となったウジェーヌ・イザイの手に渡った。1929年にイザイが結婚した元弟子のジャンネット・ディンシンに相続され、後に、指揮者シャルル・ミュンシュ (1891-1968) に売り渡された。イザイはこのヴァイオリンをベルギーに置いておきたいと希望していたが、ニューヨークの楽器商エミール・ハーマンからヘンリー・ホットィンガー氏に売却された。1965年に著名なヴァイオリン奏者アイザック・スターン (1920-2001) の手に渡り、多くの演奏会で愛用された。日本音楽財団は1998年3月にアイザック・スターンからこのヴァイオリンを購入した。

裏板はカエデの一枚板で、右下に向かって傾斜した力強い小幅の空目が見られる。横板の空目の幅は様々であるが、主に中程度の幅である。スクロールの空目も同様である。表板はスプールの二枚板で、中心の木目は細く、両端に行くほど幅広である。下地のニスは金色で、その上にオレンジと赤の中間色が広がっている。まだら模様のひびが見事に裏板のニスに入っており、この楽器の際立つ特徴とも言える。

This violin bears the name “Ysaÿe” from the Belgian virtuoso, Eugène Ysaÿe (1858-1931) who used it as his concert instrument for many years. The inscription inside the violin, written in French with red ink, reads “This Del Gesù was the faithful companion of my career. Ysaÿe 1928”. It is well-known for having taken part in the procession of Ysaÿe’s state funeral, being carried on a pillow in front of the virtuoso’s coffin. Before Ysaÿe, it belonged to the Count Baldeschi, the English collector Mr. John Adam and Mr. Charles Wilmotte, collector and amateur of Antwerp. At the request of the dealer Gand et Bernardel, Mr. Wilmotte sold the violin in Paris in 1889 to the father of Miss Carry Mess, who was a pupil of Ysaÿe and married his brother Théo. In 1896, the violin was passed to her brother-in-law Eugène Ysaÿe. Jeanette Dinsin, Ysaÿe’s pupil whom he married in 1929, inherited the violin and later sold it to the conductor Charles Münch (1891-1968). Despite the wish expressed by Ysaÿe that the violin remain in Belgium, it was sold to Mr. Henry Hottinger by the dealer Emil Herrmann of New York. In 1965, it was acquired by the renowned violinist Isaac Stern (1920-2001) and became his primary concert instrument throughout his life. In March 1995, Nippon Music Foundation acquired the violin from Isaac Stern.

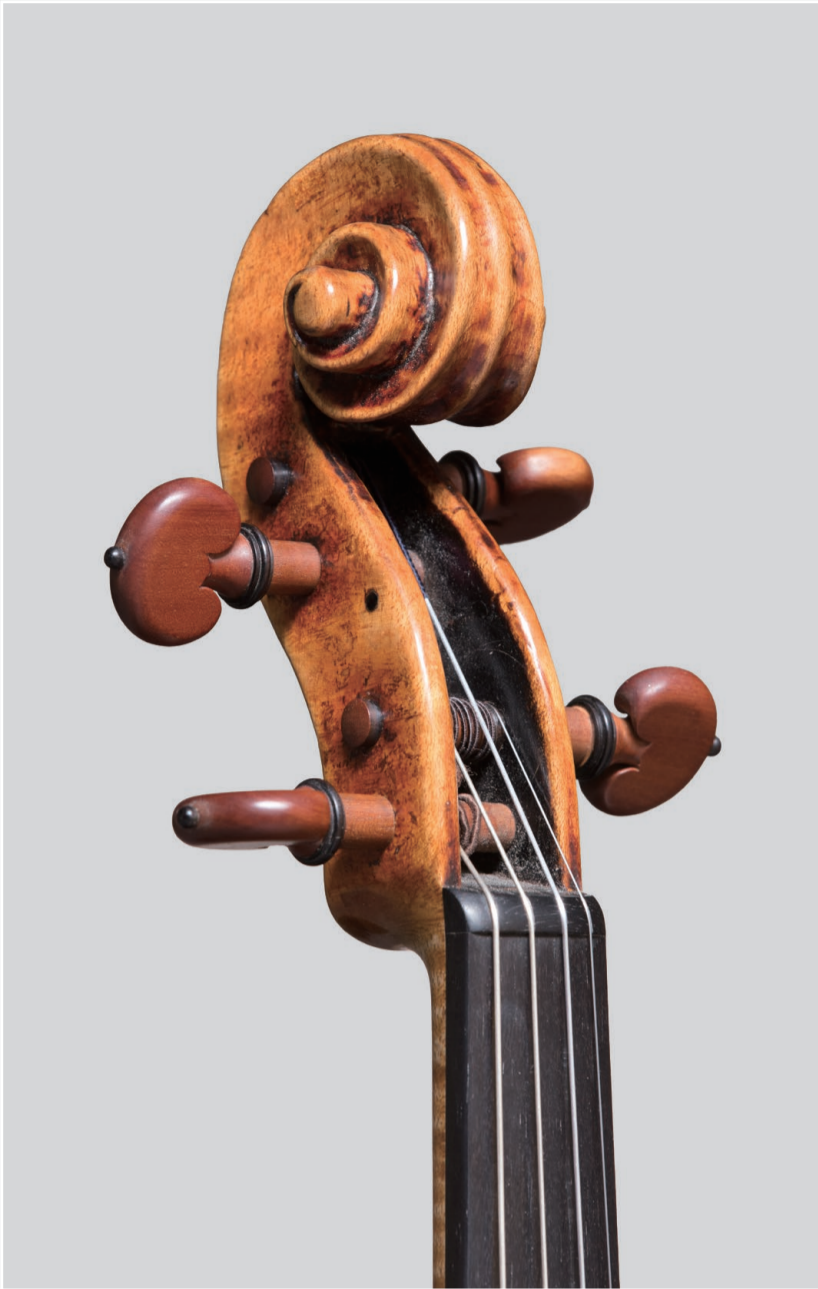
The back is in one piece of maple, marked by a strong small curl ascending to the right. The sides are marked by a varying, mainly medium curl. That of the scroll is similar. The table is of two pieces of spruce marked by very fine grain at the center, opening towards the flanks. The varnish is orange-red in color on a golden ground. The most striking feature of this violin is the magnificent chipped and mottled varnish of the back.











楽器サイズ Table of Measurements

A	Body length, back	N	Body stop
B	Maximum width, upper bouts, back	O	Distance between the upper eyes of the f-holes
C	Minimum width, C bouts, back	P	Distance across the chest at the inner notches
D	Maximum width, lower bouts, back	Q	Distance between the lower eyes of the f-holes
E	Body length, front	R-1	Right f-hole length, apex to apex
F	Maximum width, upper bouts, front	R-2	Left f-hole length, apex to apex
G	Minimum width, C bouts, front	S	Total depth of scroll
H	Maximum width, lower bouts, front	T	Width of ears
I	Rib height at end block	U	Width at heel, back of scroll
J	Rib height at upper corner block	V	Total depth of volute
K	Rib height at neck block	W	Height of first throw
L	Arching height, back	X	Narrowest point of development
M	Arching height, front	Y	Widest point of pegbox, above the upper nut

All measurements are in mm. They are taken with calipers, not over the arching.

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K
--	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

Stradivarius Violins

1680 "Paganini"	353.8	160.2	103.8	201.0	351.2	159.2	102.3	196.2	29.7	30.3	28.8
1727 "Paganini"	355.2	167.0	109.2	206.8	353.0	165.2	107.5	204.3	31.2	31.8	30.6
1700 "Dragonetti"	354.5	168.0	108.3	207.5	353.2	168.0	107.5	207.0	30.4	30.5	29.3
1702 "Lord Newlands"	353.0	166.8	108.0	206.8	356.5	166.2	106.7	204.5	30.8	31.0	30.4
1708 "Huggins"	356.5	167.0	107.8	206.0	357.0	166.0	105.8	204.5	31.5	32.0	30.0
1709 "Engleman"	356.5	167.0	108.6	207.0	355.0	167.0	107.3	206.0	31.0	30.5	29.5
1710 "Camposelice"	352.5	166.2	109.0	206.0	349.5	164.5	106.1	203.8	31.6	30.6	29.2
1714 "Dolphin"	353.5	167.0	108.3	206.5	351.5	166.5	107.4	206.0	32.0	32.3	30.0
1715 "Joachim"	352.5	165.5	107.0	205.5	350.5	165.0	106.5	203.0	31.2	31.8	30.0
1716 "Booth"	353.0	166.0	108.0	206.0	350.0	163.5	104.5	203.0	31.0	30.8	28.5
1717 "Sasserno"	352.9	167.0	108.5	206.2	352.2	166.0	106.8	205.0	31.0	31.2	29.4
1722 "Jupiter"	355.0	167.5	109.5	206.0	353.5	166.0	107.7	205.0	31.3	31.4	28.9
1725 "Wilhelmj"	356.5	165.5	108.5	204.0	353.5	164.5	107.2	202.5	31.0	31.3	29.0
1735 "Samazeuilh"	353.5	161.0	109.5	201.3	351.0	160.0	106.5	200.0	31.2	31.4	30.5
1736 "Muntz"	354.0	160.5	109.4	201.5	352.0	162.0	107.6	201.0	31.0	31.5	29.3

Stradivarius Viola

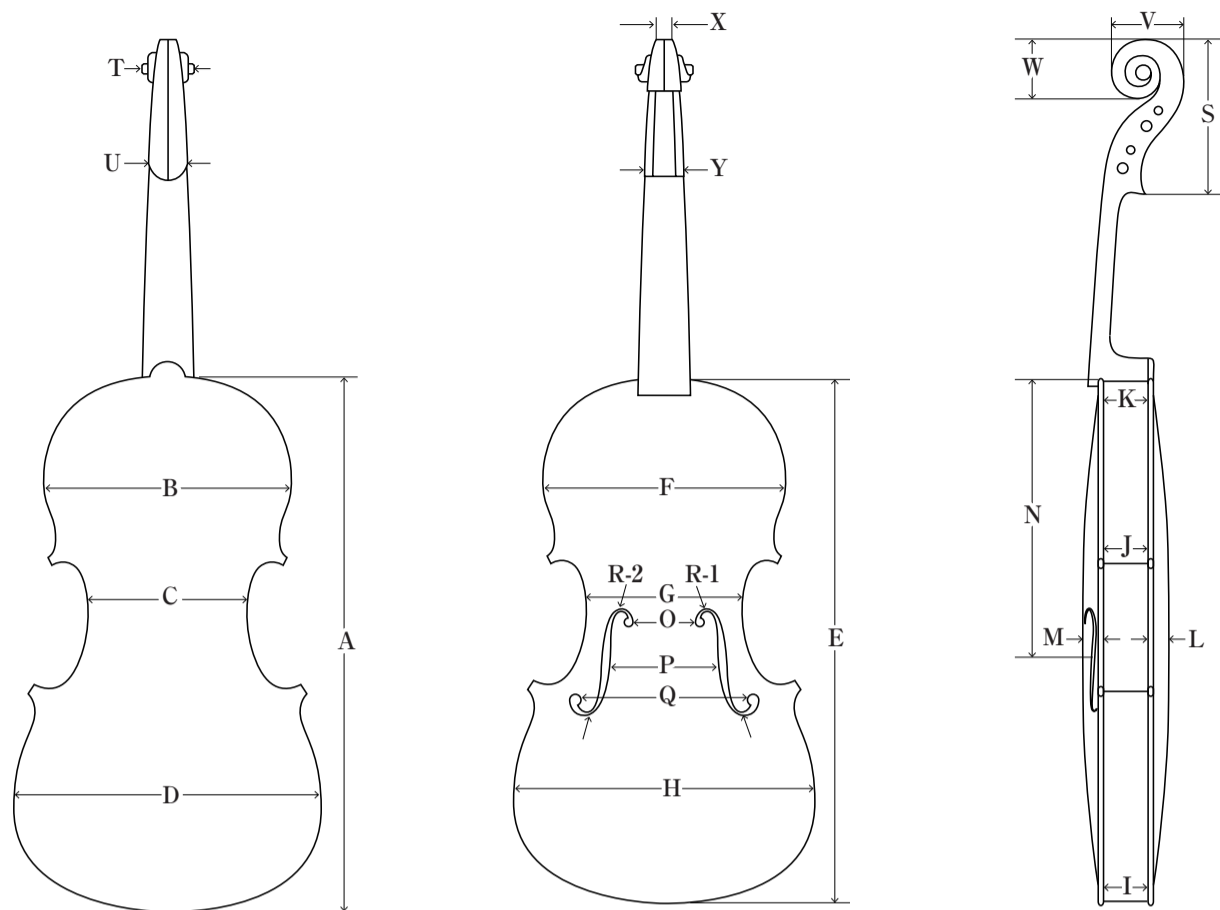
1731 "Paganini"	410.0	185.0	125.8	240.3	398.8	184.2	124.0	238.6	36.0	37.4	36.6
-----------------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	------	------

Stradivarius Cello

1696 "Lord Aylesford"	776.1	357.2	242.2	456.9	771.9	358.4	244.5	458.6	115.0	112.5	108.0
1730 "Feuermann"	744.5	322.0	213.0	416.0	744.0	322.0	210.0	415.0	122.6	118.0	115.6
1736 "Paganini"	756.0	339.5	229.0	433.0	757.0	341.5	229.0	434.0	126.0	123.0	121.0

Guarneri del Gesù Violins

1736 "Muntz"	349.0	166.0	110.0	203.0	349.0	165.0	109.5	202.5	30.0	29.8	28.0
1740 "Ysaÿe"	352.5	164.5	110.1	203.0	352.0	162.5	106.0	201.0	30.2	30.4	29.4



(mm)

L	M	N	O	P	Q	R-1	R-2	S	T	U	V	W	X	Y
---	---	---	---	---	---	-----	-----	---	---	---	---	---	---	---

15.3	17.3	192.4	34.7	65.6	103.0	72.5	73.0	105.0	39.2	25.4	49.5	38.3	10.4	24.8
13.5	15.8	191.5	42.8	75.7	110.0	73.4	74.5	104.5	41.2	26.0	49.4	38.0	11.5	25.6
15.7	15.0	197.0	37.8	71.0	107.8	73.5	74.6	106.2	40.5	25.6	50.5	39.5	11.8	25.6
14.2	14.7	191.0	39.3	73.7	110.0	73.8	75.3	105.2	41.5	25.4	50.0	40.0	11.3	25.5
15.5	16.0	194.0	40.0	72.5	102.0	74.8	74.5	105.0	40.3	26.2	49.0	38.5	12.5	25.5
17.0	15.0	195.0	38.5	72.5	110.1	73.6	74.9	105.4	40.2	24.9	51.0	39.5	11.6	24.9
14.7	15.5	193.5	41.3	72.3	108.8	74.2	74.4	104.5	41.4	25.8	48.8	37.6	12.4	24.8
15.0	14.0	194.0	39.9	71.8	109.6	74.2	74.2	105.5	40.5	25.5	49.0	38.5	11.6	24.7
15.2	15.5	196.0	40.4	73.8	111.8	73.8	73.5	105.5	41.2	26.2	50.5	39.0	11.5	24.6
15.0	16.0	195.0	39.2	70.0	105.8	74.6	74.0	105.7	41.5	26.0	49.5	37.2	11.5	25.2
14.8	15.0	195.0	39.1	71.5	107.7	73.4	73.7	105.5	41.1	25.9	50.0	38.0	11.4	25.4
15.5	16.0	194.0	43.5	75.0	109.5	74.3	74.5	104.4	41.4	25.9	50.0	37.5	12.3	25.5
15.0	16.5	194.5	42.3	75.0	109.8	74.3	73.5	104.5	39.5	25.7	50.7	39.0	11.6	25.1
14.2	15.9	192.2	43.7	72.7	109.0	75.8	74.3	104.0	41.2	26.0	49.6	39.2	12.3	25.2
14.5	15.5	191.0	40.8	72.5	110.0	73.3	74.6	106.0	41.0	27.0	50.5	38.0	12.5	26.3

17.7	18.5	219.5	48.0	83.5	122.8	83.0	84.5	134.0	49.8	34.4	62.0	46.5	14.3	34.2
------	------	-------	------	------	-------	------	------	-------	------	------	------	------	------	------

38.8	28.8	410.0	104.4	161.0	217.0	136.8	137.2	215.5	70.0	44.3	92.5	74.5	19.0	45.0
27.5	25.0	404.0	81.4	142.5	206.5	126.0	128.5	205.0	66.6	44.4	86.0	68.0	19.0	43.4
28.0	29.0	407.0	96.0	153.0	208.5	132.5	131.7	207.5	67.0	47.4	88.0	69.5	19.9	46.5

15.0	16.5	193.0	42.5	69.8	106.4	77.1	75.5	108.2	38.5	24.7	50.5	37.4	10.5	24.2
15.0	16.0	195.5	38.5	69.3	108.0	78.0	76.2	108.0	40.1	26.5	51.0	40.0	10.7	26.3

参考文献 References

- Beare, C. (1993). *Antonio STRADIVARI: The Cremona Exhibition of 1987*. J & A Beare, Ltd.
- Biddulph, P. (1994). *The Violin Masterpieces of Guarneri del Gesù: AN EXHIBITION AT THE METROPOLITAN MUSEUM OF ART COMMEMORATING THE 25TH ANNIVERSARY OF THE MAKER'S DEATH*. Peter Biddulph
- Doring, E. N. (1945). *HOW MANY STRADS?: OUR HERITAGE FROM THE MASTER*. Bein & Fushi, Inc.
- Goodkind, H. K. (1972). *VIOLIN ICONOGRAPHY OF ANTONIO STRADIVARI: 1644-1737*. Herbert K. Goodkind
- Hill, W. H., & Hill, F. S. A, A. F., & Hill, A. E. (1902). *ANTONIO STRADIVARI: HIS LIFE AND WORK (1644-1737)*. W. E. Hill & Sons
- Hill, W. H., & Hill, F. S. A, A. F., & Hill, A. E. (1902). *ANTONIO STRADIVARI: HIS LIFE AND WORK (1644-1737)*. W. E. Hill & Sons (1980 edition)
- Hill, W. H., & Hill, F. S. A, A. F., & Hill, A. E. (1931). *THE VIOLIN-MAKERS OF THE GUARNERI FAMILY (1626-1762)*. W. E. Hill & Sons
- Hill, W. H., & Hill, F. S. A, A. F., & Hill, A. E. (1931). *THE VIOLIN-MAKERS OF THE GUARNERI FAMILY (1626-1762)*. W. E. Hill & Sons (1980 edition)
- *THE HENRY HOTTINGER COLLECTION (1967)*. Rembert Wurlitzer Inc.
- *THE STRINGED INSTRUMENT COLLECTION IN THE CORCORAN GALLERY OF ART (1986)*. GAKKEN Co., Ltd.
- Private archives in the possession of Beare Violins Ltd.
- Private archives in the possession of Nippon Music Foundation
- Private archives in the possession of W. E. HILL

ストラディヴァリウス 1680 年製ヴァイオリン「パガニーニ」 Stradivarius 1680 Violin "Paganini"

- Certificate - Emil Herrmann, to Anna E. Clark, January 16, 1946
- Certificate - Caressa & Français, Succrs, to Pierre de Ellisseieff, December 18, 1922

ストラディヴァリウス 1727 年製ヴァイオリン「パガニーニ」 Stradivarius 1727 Violin "Paganini"

- Certificate - Emil Herrmann, to Anna E. Clark, January 16, 1946
- Certificate - W. E. Hill & Sons, to Felix E. Kahn, August 25, 1914

ストラディヴァリウス 1731 年製ヴィオラ「パガニーニ」 Stradivarius 1731 Viola "Paganini"

- Certificate - Emil Herrmann, to Anna E. Clark, January 16, 1946
- Certificate - W.E. Hill & Sons, September 11, 1936

ストラディヴァリウス 1736 年製チェロ「パガニーニ」 Stradivarius 1736 Cello "Paganini"

- Certificate - Emil Herrmann, to Anna E. Clark, January 16, 1946

ストラディヴァリウス 1700 年製ヴァイオリン「ドラゴネッティ」 Stradivarius 1700 Violin "Dragonetti"

- Certificate - John & Arthur Beare, to Olivier Jacques, June 23, 1988
- Certificate - W. E. Hill & Sons, to Alfredo Campoli, April 30, 1963

ストラディヴァリウス 1702 年製ヴァイオリン「ロード・ニューランズ」 Stradivarius 1702 Violin "Lord Newlands"

- Certificate - Etienne VATELOT, to Suhail F. Saba, November 28, 1994
- Certificate - W. E. Hill & Sons, to Suhail F. Saba, May 17, 1982

ストラディヴァリウス 1708 年製ヴァイオリン「ハギンス」 Stradivarius 1708 Violin "Huggins"

- Certificate - W. E. Hill & Sons, to Felix. E. Kahn, August 26, 1919

ストラディヴァリウス 1709 年製ヴァイオリン「エンゲルマン」 Stradivarius 1709 Violin "Engleman"

- Certificate - René A. Morel Rare Violins, Inc., April 7, 1998
- Certificate - Jacques Français, to Ephraim P. Engleman, November 19, 1986
- Certificate - W. E. Hill & Sons, to Pierre Lacombe, September 4, 1951

ストラディヴァリウス 1710 年製ヴァイオリン「カンポセリーチェ」 Stradivarius 1710 Violin "Camposelice"

- Certificate - W. E. Hill, to Nippon Music Foundation, November 16, 2004
- Certificate - W. E. Hill, September 6, 2004
- Certificate - Jean-Jacques Rampal, to Nippon Music Foundation, August 31, 2004
- Certificate - John & Arthur Beare, to Joseph Delière, November 22, 1977
- Certificate - W. E. Hill & Sons, to J.L. Gardner, July 17, 1894

ストラディヴァリウス 1714 年製ヴァイオリン「ドルフィン」 Stradivarius 1714 Violin “Dolphin”

- ・ Certificate - William Moennig & Son, Inc., to C. M. Sin, July 28, 1970
- ・ Certificate - W. E. Hill & Sons, to Jascha Heifetz, May 18, 1951
- ・ Certificate - W. E. Hill & Sons, to G. H. Kemp, January 2, 1933

ストラディヴァリウス 1715 年製ヴァイオリン「ヨアヒム」 Stradivarius 1715 Violin “Joachim”

- ・ Certificate - John & Arthur Beare, to Nippon Music Foundation, September 13, 2000

ストラディヴァリウス 1716 年製ヴァイオリン「ブース」 Stradivarius 1716 Violin “Booth”

- ・ Certificate - John & Arthur Beare, to Nippon Music Foundation, February 23, 1999
- ・ Certificate - The Rudolph Wurlitzer Co., to Mischa Mischakoff, May 5, 1931
- ・ Certificate - W. E. Hill & Sons, to A. E. Russell, September 29, 1930

ストラディヴァリウス 1717 年製ヴァイオリン「サセルノ」 Stradivarius 1717 Violin “Sasserno”

- ・ Certificate - John & Arthur Beare, to Nippon Music Foundation, May 14, 1999
- ・ Certificate - W. E. Hill & Sons, to Henry Summers, February 24, 1906

ストラディヴァリウス 1722 年製ヴァイオリン「ジュピター」 Stradivarius 1722 Violin “Jupiter”

- ・ Certificate - Rembert Wurlitzer, Inc., to Ephraim P. Engleman, May 4, 1971

ストラディヴァリウス 1725 年製ヴァイオリン「ウィルヘルミ」 Stradivarius 1725 Violin “Wilhelmj”

- ・ Certificate - W. E. Hill & Sons, March 28, 1972
- ・ Certificate - Rudolph Wurlitzer Co., to Thomas Fawick, October 6, 1944
- ・ Certificate - W. E. Hill & Sons, to Wurlitzer, June 3, 1921

ストラディヴァリウス 1735 年製ヴァイオリン「サマズィユ」 Stradivarius 1735 Violin “Samazeuilh”

- ・ Certificate - Roland Baumgartner, to Nippon Music Foundation, August 11, 2017
- ・ Certificate - Albert Caressa Succrs, to Mischa Elman, June 15, 1923

ストラディヴァリウス 1736 年製ヴァイオリン「ムンツ」 Stradivarius 1736 Violin “Muntz”

- ・ Certificate - Hamma & Co. (Walter Hamma), to Jacques Français, November 21, 1972
- ・ Certificate - Jacques Français, to Howard Gottlieb, October 24, 1972
- ・ Certificate - Jacques Français, to Howard Gottlieb, September 28, 1972
- ・ Certificate - Rembert Wurlitzer, Inc., to Steven Staryk, April 8, 1969
- ・ Certificate - Hamma & Co. Stuttgart, February 6, 1950

ストラディヴァリウス 1696 年製チェロ「ロード・アイレスフォード」 Stradivarius 1696 Cello “Lord Aylesford”

- ・ Certificate - Rembert Wurlitzer, Inc., to Henry Werro, October 12, 1966
- ・ Certificate - Emil Herrmann, to Hugh W. Long, September 28, 1959
- ・ Certificate - W. E. Hill & Sons, to Gregor Piatigorsky, October 22, 1946

ストラディヴァリウス 1730 年製チェロ「フォイアマン」 Stradivarius 1730 Cello “Feuermann”

- ・ Certificate - Rembert Wurlitzer, to Aldo Parisot, August 4, 1956
- ・ Certificate - W. E. Hill & Sons, to Emanuel Feuermann, April 5, 1939

ガルネリ・デル・ジェス 1736 年製ヴァイオリン「ムンツ」 Guarneri del Gesù 1736 Violin “Muntz”

- ・ Certificate - Jacques Français, to Giorgio Ciompi, December 16, 1981
- ・ Certificate - Hamma & Co. Stuttgart, July 31, 1970
- ・ Certificate - Max Möller & Zoon, June 10, 1970

ガルネリ・デル・ジェス 1740 年製ヴァイオリン「イザイ」 Guarneri del Gesù 1740 Violin “Ysaÿe”

- ・ Certificate - Rembert Wurlitzer, Inc., to Isaac Stern, October 9, 1965
- ・ Certificate - Emil Herrmann, to Charles Münch, April 1, 1958
- ・ Certificate - Albert Caressa Succrs, to Charles Münch, July 29, 1938
- ・ Certificate - Albert Caressa Succrs, to Madame Charles Munch, November 8, 1937

Special Thanks To

Mr. Andrew Hill of W. E. Hill, Messrs. Charles, Peter and Freddie Beare of Beare Violins Ltd.,
Mr. Hieronymus Köstler and Ms. Anette Goller of Geigenbaumeister Hieronymus Köstler, and Mr. Hiroaki Hara of Hara Fine Violins

Instruments of Nippon Music Foundation

2021年3月 初版第1刷発行

制	作	公益財団法人日本音楽財団
助	成	公益財団法人日本財団
撮影／撮影助手		川本 聖哉 / 小山 貢弘 下川 晋平
印刷・製本		大光社印刷株式会社 光村印刷株式会社
発行		公益財団法人日本音楽財団
		〒107-0052 東京都港区赤坂1丁目2-2
		TEL : 03-6229-5566 FAX : 03-6229-5570
		URL : https://www.nmf.or.jp Email : info@nmf.or.jp

Produced by	Nippon Music Foundation
Supported by	The Nippon Foundation
Photographer / Assistants	Seiya Kawamoto / Mitsuhiro Koyama Shimpei Shimokawa
Printed by	Daikosha Printing Co., Ltd. Mitsumura Printing Co., Ltd.
Published by	Nippon Music Foundation
	1-2-2 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-0052 JAPAN
	TEL : +81-(0)3-6229-5566 FAX : +81-(0)3-6229-5570
	URL : https://www.nmf.or.jp Email : info@nmf.or.jp